

# 吉野都女楠

作者 近松門左衛門

大權聖者一佛の人となつて現はる、事聖徳太子を云ふ  
東魚一北條高時  
西鳥一常、新田  
をさす(太平記)  
九五一天子の  
位、九五飛龍在  
天(易經)

新沙一落つと八  
重の沙路とかく

序往を尋て來れるをしる、大權聖者の未來記見つんべし。東魚來つて四海を呑み、西鳥來つて東魚をくらひ、海内既に一に歸し、二度九五の御位、後醍醐の帝と重祚ある。逆臣相摸入道が一族亡びて後、足利治部、大輔高氏、聊朝家を怨み奉り、東國勢を引率し、矢矧鷲坂竹の下、數か度の軍に勝誇り、己と征夷將軍にをしなつて、帝都まぢかく責入しを、新田左中將義貞、楠判官正成、陳平、張良が肺肝より出たるごとき名大將、命を風前の塵にかけ、義を金鐵より堅くして、驅破り驅惱まし、千變萬化の合戦に、さしも高氏終に打負、筑紫を差て落じほの、八重九重や都の内、萬歳をこそ唱へけれ。時に建武三年五月十五日、新田義貞早馬を立て奏聞ある。「抑朝敵高氏大友少貳を順へ、九州の軍兵五十萬騎、兵船數千艘にて責上り、高氏が弟直義、山陰山陽の大勢陸路をうつて雲霞のごとく、播磨の赤松敵に組し、苦繩の城に立籠り、官軍を遮り候を、義貞備

搦手一裏手  
蒸す一閉籠めて  
攻める

惣じて一體

後備中にさよへ、挑み戦ひ候間に、敵船はや須磨明石をはせ越候」と、追々并進頻なり。天皇大きに驚かせ給ひ、楠判官正成を、頓て御前に召れける。「扱義貞が注進事急なり、罷向つて合戦を致すべし」との勅説。楠畏つて奏せしは、「數年の軍に疲れたる御方の小勢、筑紫方は新手の大勢機に乗たるに驅合せ、常の如くの合戦は、御方打負申さんこと決定。先新田殿をも召かへされ、君は比叡山へ臨幸なり、正成も河内に退ぞき、敵を都へおびき入、河じりをさし塞ぎ、籠の鳥の如くにして、兵糧を留敵軍次第に疲れ落ん、所を新田殿は山門より押寄、正成は搦手より責上り、眞中につよんで一蒸むす程ならば、朝敵一戦に亡びんこと、正成が方寸の内に覺へ候。軍は必一たんの勝負を見ることなかれ、始終の勝こそ肝要にて候へ。たとへ官軍百度戦ひ百たび負る共、正成一人生て有と聞召ば、聖運終にひらかるべし、と思召れ候へ」と、世に頼もしくぞ奏しける。坊門の宰相清忠、御簾の前につよと出で、譚ヤア臆したるか楠、尊氏が多勢に聞おぢして、一戦にも及ず河内へ退ぞき、君を比叡山へ臨幸なし奉れとは、命の惜さに帝位を輕しめ申よな。惣じて新田義貞、勾當の内侍に思ひを残し、都に心引かるゝ故、軍手ぬるく敵にきほひ付たるに、御邊も河内へ引んとは、古郷の妻子がゆかしいか。伊豫の國の住人大森

謀を云々—帷幄  
は幕也、此句史  
記高祖本紀にあ  
り

軍法不覺—軍事  
に不心得

震襟—宸襟

彦七盛長と云ふ武士、尊氏に組するといへ共、某に縁有故、裏切して味方に力を加へんとの内通あれば、味方の勝利目前にて、御邊らが命に氣遣のないことは此宰相が請合。はや／＼發向有べし」と、嘲り顔して申さるよ、楠もとより私の怒りに忠を忘れぬ良勇、彌おもてを柔け、正仰にては候へ共、其大森彦七が内通にて、味方勝に極らば、猶以て正成向ふ迄も候はず。去ながら詩歌管絃は殿上の御もて遊び、弓馬合戦の道は武門の諫言に任せられ、是非に都を明渡し、敵に一たん勝を與へ、重て畢竟の勝を御覽有こそ、謀を帷幄の内に旋らし、勝事を千里の外に顯はす籌策にて候」と、子房が祕藏孔明が骨髄残るかたなく奏せらる。宰相大きに色を損じ、眞御邊が云迄もなく、弓馬合戦の道なればこそ、賤しき汝等禁庭へ召るよ條、有がたしとは存ぜずや。先年御邊千早赤坂の城郭にて、六波羅の大勢を傾け、相摸入道亡しも、全く武略の手柄にあらず。君の聖運天に叶ひ、宗廟社稷の大小の、神祇王法を守護し給ふ故、殊に今度は目に見へたる勝軍、大森が御蔭にて、手柄すべきは此度、はやうつ立」と有ければ、軍法不覺の卿相雲容口、「敵の内通有からは、天の與此時、是非く楠はせ向ひ、朝敵尊氏一戦に責亡ほし、震襟を休め奉れ」と、衆議一決の勅詔は、うたてかりける御運なり。正成も此上はさの

一俗一旅

新發意一新一佛  
門に入りし者の  
稱  
雲こり一雲かた  
まる

み申に及すと、御前を立けるが、是ぞ最期の合戦と、思ひ定し忠臣の、屍は刃にきゆ  
 れ共、義は碎かれぬ楠と、朽せぬ名をこそ三重留めけれ。元來正成智仁勇を兼備し、死  
 を善道に守る良將、今度の合戦味方必定負軍、討死の時極れりと、本國へも立歸らず、  
 直に五月十六日、有あふ手勢五百餘騎、嫡子帶刀正行十一歳、父が馬に押並べて打けれ  
 ば、舍弟正季一俗和田の新發意源秀、同新兵衛尉、紀六左衛門恩地の左近、馬物の具  
 を輝かし、心の花も咲かくる、櫻井の宿に著けるが、まだ雲こりて五月雨の、やよ夕立  
 と降雨は、瀧の落るが如くにて、人馬の足を立かね、生田の森に打入て、暫らく晴間を  
 待居たり。雨に浪よる昆野の池、堤を急ぐ叢笠は、早苗の賤かと思すつれば、下部貳人  
 に長持かよせ、四十余りの女房の、雨にあらそふ涙の雫、しほれまろびて走りくる。下  
 部共長持どつかと下し、一エ、どう因果の夕立や、目も鼻もあかれぬ。いざ來いあの森で、  
 少晴して行まいか。コレそこな女子殿、長持預けた番めされ」と二人は森へぞ走りける。  
 女とかふにかきくれて、歎き沈みて立ちけるが、思ひより有顔付にて、長持の棒取て捨  
 石を拾ひてちやうくく、敲く手先に力なき、女力も念力の、天や見透す鑑の穴、錠  
 前はなれ落ちければ、女なふ有がたや、サアお出」と、蓋を取る手にすがり付、廿計の上

功德池一橋樂に  
八つの功徳池ありと云ふ  
ほぞん一本尊佛  
を云ふ、郭公の  
鳴聲はほぞんか  
けたかと云へば  
續けたり

手ぶり云々手  
ふらで味方へ歸  
れば我々の命が  
ない此方へ來い  
と也

藤の、涙ひまなく息籠り、顔にばら付亂れ髪、柳櫻をこきまぜて、水にうかめし如くなり。女いざ下部共の來ぬさきに」と、抱出せば、与ア、嬉しや、此池こそみづからに、菩提を進むる功徳池よ。そなたも數珠を持ってか「女お肌はだに御ほぞんかけてか」与ヲ、ほぞんかけたる時鳥、あやめの沼は水淺し」と、深みを尋さまよひたる。正成馬上より、遙に見付、「あれく、身を投る女有。敵か味方か何れにもせよ、源秀かけ付助けられよ」と有ければ、「承る」と和田新發意、あぜを傳ふて走りよる。其丈六尺七寸、古の辨慶もあざむく計、鬼の様成赤入道。二人は「あはや」と手を合せ、飛入所を引寄てしつかと抱く。「なふそふせいでも死ぬる身を、せめて身躰からだに疵付ず、死なせてたべ」と飛入を、源是上藤、殺す程なら何のとめふ。あれ成は楠判官正成、物の哀れを見捨ぬ氣質、子細とつくと聞届よとの使なり」と云ければ、与扱は楠殿とや。みづからこそ新田義貞の妻勾當の内侍なり。お情けに新田殿の陣屋へ送りたべかし」と、の給ふ所へ二人の下部立歸り、「ヤアウ長持の錠捻切た。己れ取逃し手ぶりで歸つてこちとが命有物か。こつちへうせふ」と取付所を、源秀二人が首筋ひつ掴み、「手ぶりで歸れば取るよ命、爰にて取てくれんず」と、蘆間にかつばと打こめば、五躰をからむ菱かづら、泥にゑふてぞ失に

妻一夫の事以下  
同じ

ぬらし一線を違  
ぶる事

けり。其隙に楠親子馬乗はなし、とかふいたはり給ひければ、内侍も涙にくれながら、「常々妻の物語り、楠判官正成は、慈悲第一の大將と、聞しにかはらぬ御情、何と報じ参らせん。一とせ猿樂見物の時、伊豫の國の住人大森彦七盛長とやらん、みづからに心をかけ、坊門の宰相を中立にて、威勢でおどし文でぬらし、色かへ品かへ口説しを、つれなく返事もいたさぬ間に、新田義貞の妻と成たるは、上様よりの勅説、天下晴ての夫婦ぞや。夫に此度義貞殿、西國發向の留守を覗ひ、宰相理不盡に亂れ入、先約は大森仲人の宰相義理が立ぬの何のとて、無理無躰に長持に押入て送らるよ。なふやるかたなさ便なさ。乳母が慕ひくるとは知らず、頭もあがらず息もならぬ長持を、揺るやら振るやら打付まはる、其響胸にこたへ、目もくらくと幾度か死入し。火の車にのせて行地獄の迎ひもかくやらん。此上のお情に我妻の陣屋迄、送り届けて給はれ」と、めのと諸共手を合せ、かきくどきてぞ泣給ふ。正成打うなづき、「さこそく。我大内を出しより、か様のことのあらんとは、宰相が詞の色にて察せしなり。義貞の御陣所へ送り申はやすけれ共、宰相かくと洩聞ば、陣場へ女中を召れしと悪様に奏聞し、叡慮を以て御夫婦の中をさかば、御恥辱を招くに似たり。それく源秀、是より都へ御供し、立惠法印に

勤學院の雀一勤  
學院は藤原氏の  
學問所、其處に  
住む雀は豪求を  
嗜ると云ふ、恐  
る大略を知れる  
を云ふ  
しやみち〜  
まなり〜

養由が云々養  
由は楚人にて可

預け參らせよ。道中人に悟られぬ用心第一、とく〜と有ければ、逆合點〜智略は  
お家、勸學院の雀任せてをけ」と小躍して、良等二人が具足をぬがせ、長持に入棒さし  
通しになはせて、「是内侍様もめのごも、慮外ながら下女にして、我等は又此躰」と、  
内侍の襦袢鎧の上に衣かづき、二王の様なる大入道、五日歸りの花嫁と、しやなら〜  
とふりかけて、逆サア腰本衆、早ふおじやや」と夕影も、眼は朝日てる月の、都の方へ  
と急ぎける。正成遙に見送つて、嫡子正行を招き涙をうかめ、「汝幼く共能聞をけ、忝も  
我帝に頼まれ奉り、命を敵の矢先にかけて、身を戦場になげうつこと、譽を取て名を残さ  
ん爲にもあらず、子孫の榮華を希にもあらず、朝敵を亡し國家安全の、叡慮をやすめ  
奉らんと、義を重んずる計なり。今度の合戦味方必定打まけ、王法忽傾き、御代を奪  
はれ給はんこと、鏡に照すがごとくなれば、我一ツの謀を以て、さま〜諫め申せ共、  
坊門の宰相よこしまの理を進め、君用ひさせ給はねば、力なくうつ立たり。父が一期の  
名残の軍、花々敷戦ひ、一戦に腹を切べきぞ。おことは是より故郷に歸り、父が最期と  
聞ならば、彌身を全ふして、廿にも余る時、金剛山を要害として、住吉天王寺に打つて  
出、近隣を劫し、討手向はど一命を、養由が矢先にかけて、義を紀信が忠烈にくらべせ

の名人、紀信は  
源高祖に代りて  
死したる忠臣、  
此句も太平記に  
あり

め戦ひ、君を御代に立參らせ、父が憤りを散せんこと、いか成佛事孝養も、是にはな  
どか勝るべき。今生にて汝が良見することも是迄ぞ。必詞を忘るよな」と、勇氣たゆまぬ  
弓取も、恩愛父子の浮世の別れ、涙をはら／＼とぞ流しける。正行聞もあへず、「口惜き  
父の仰せやな。楠正成が嫡子正行こそ、負軍を考、道より逃て歸りしと、世の嘲りに  
落んこと、かばねの上の恥辱候。ことに親の討死と、思ひ定し軍場を、見捨る子や候べ  
き。是非御供につれられずは、我等一騎かけぬけ、敏達天皇の後胤、井手の左大臣楠  
の諸兄公の末葉、楠河内の判官が嫡子帶刀正行、生年十一歳と名乗て能敵にかけ合せ、  
引組でさしちがへ、冥途の道のさがけと、思ひ詰たる正行、敵の旗をも見ぬさき、  
歸れとはうらめしや。幼なくて戦場の、妨と成ならば、只今爰にて腹切らん、介錯して  
たべ人々」と、芝の上はどうど居て、聲も惜まず泣ければ、有あふ軍兵感涙に、鎧の袖  
をぞ絞りける。正成もともに涙は先だて共、わざと聲をあらよけ、正ヤア弓馬の家に生れ  
て、討死するが珍しきか。おことを年月養育せしは、父が最期の供せよとては育てぬぞ  
や。戦ふべき所に進み、引べき所に退き、天下に功をたつこそ、能弓取とは名付たれ。  
傳へ聞西天に獅子といふ獸有、其獅子子を産で三日の内其子を、數千丈の巖壁より眞



吉野初瀬云々  
親は死しても子  
は其忠義を受繼  
ぎて譽を現はす  
壁  
引合―鎧の右腋  
にて弦走の合せ  
目

倒さかに投落なげおす。獅子の氣分きぶんなき子は、岩角いはかどに身を破やぶつて當座たうざに死す。いきほひそなはる獅子の子は、中ちゆうよりひらりと駈返はなへり、身を全ぜんふすと傳つたへたり。我子の心を見ることは、畜類ちくるいとても斯かくの如ごとし。今諸國いましよこく八方はつぱうに峙そはだつたる敵なかの中なか、をさなき汝を歸かへすこと、かの巖壁がんぺきに投なげうつ獅子の子よりも猶なほあやうし。汝勇士なほの氣分きぶん具ぐらば、數萬たふの敵なかの鋒先ほんざきの巖石がんせきも、しのぎて碎くだく獅子のいきほひ、太平たいへいの御代ごだいとはね返かへせ。吉野初瀬よしのはつせの名木なまきも、老木らうきは次第しだいに枯かれ共ども、こほると種いづかの色香いろかをつぎ、花はなの名高なき山やまぞかし。二葉ふたはの苗なへを残のこすこそ、いはほとならん楠なが、永ながき世迄よまでのかたみぞ」と、鎧よろひの引合ひきあより一卷くわんを取とり出し、「是これぞ我祕わがひする所の軍術ぐんじゆつ、此書このしよを讀よんで道みちを得えば、父正成ちやうせいがながらへ有あも同前どうぜんならん」と、一卷くわんを手に渡し、「サア此上こゝにも聞分きこなく、腹切はらきらばきれ供たもせよ。父ちちが云いふことは是迄これまで」と、馬引うまひよせゆらりと乗のり、思おもひ切きたる心こゝろにも、ゆゑ數我子あまがこの武者振むしやがり、見みるも限かぎりと目めにもろき、涙なみだに手綱たづなくりそへて、駒こまをひかふる計はかりなり。正行ちやうぎやうも理りに當あたる、親おやの教訓けうくん詮方せんかたも、涙なみだをおさへ「御詞おんことば一々承うり候まう」と、一卷くわん取とりて戴いたき、めのととの恩地おんぢに馬引うまひせ、手綱たづなかいくりに打乗うちまつて、親子おやこ此世このよのわかれの詞ことば、さらばとだにもいはどころ。父おや、欲よくを忘わすれ情なさけを知しり、義ぎにたくましき大將たいしやうは、百萬騎ひやくまんきにかこまれても、恥辱ちじよくの死しはせぬ物ものぞ。此理このりに背そむく武士ぶしは、

勝も誠の勝ならず、恥を子孫に残すなり。心得たるか正行「子承り候」と、互に駒を引かへし、東西に別れしが、振り返りく、親は我子の身の行衛、子は又親の最期の末、思ひつよみて弓取の、泣ぬを今の涙とは、よその袂にせきかくる、湊川へぞ三重寄にける。明れば五月廿五日、高氏の軍兵海手山手百萬余騎、楯をならし箆をたよき、鬨をどつとぞ上たりける。楠手勢七百余騎、同時に鬨をつくり立、多勢が中にわつて入、喚叫んで三重戦ひける。味方は小勢と云ながら、一命を義路にかけ、名を末代にとどめんと、思ひ切たる勇士共、北より南へ追なびけ、西より東へわつて通り、息をも續せず責かくれば、さしもの大勢さよへかね、須磨のうへ野へさつと引、後陣の勢をぞ待居たる。大森彦七盛長、駒かけすへ大音上、「鬼神ならぬ楠、某が一軍に、正成兄弟首取て、敵味方の目を覺さん。彦七を手本にせよ」と、廣言吐て打てかよる。正成も駒かけよせ「何大森とや。合ぬ敵不足ながら、心ざしのやさしや」と、驀地に駈出す。此いきほひに氣を失ひ、逃鞭打てひつかへす。馬きたなしかへせ」と追かけしは、早瀬の鮎を鶺鴒の鳥の追ふてまはるがごとくにて、程なく追つめ盛長が、上帯つかんでどうど打付、首をかよんとせし所へ、薬師寺十郎同次郎、左手右手よりむすと組。馬しや物々し」と兩手をのべ、草摺

驀地―傍見もせず突進する

しや物々し―ものれ小瀬な

九界一六道と聲  
聞聲覺悟とな

宗徒一旨と頼む  
輩

つかんで捻あふ間に、大森小脇をそつと抜け、跡をも見ずして逸失けり。正、エ、大事の敵を洩せしものをのれら故」と、兩脇にしつかと挟み、ゑいやうんとしめ付けば、目口より血を流し、二人一所に伏たりける。是を元て吉良、石堂、高、上杉六千余騎、「楠を討留ん」と、八方より喚てかゝる。正成元より討死と思ひ定し晴れ軍、「望む所」と太刀さしかざし、打て出れば正季、正員和田五郎、宗徒の兵ぬきつれ、死物狂ひのおがみ打、當る者を幸に、なぎ立く、三重追まはす。され共敵は百萬余騎、入かへく、責立れば、七十三騎に討なされ、正成今は是迄と、一村在家に走り入り、是屈竟の最期場と心靜に鎧ぬぎ捨、正、いかにかたぐ、抑最期の一念に由て、善惡の生を引といへり。九界の間に何が御邊の願ひ成」と問ひければ、弟の正季からくと笑ひ、只七生迄は同じ人間に生れ出、朝敵高氏を亡ほさんこと、我等が願ひの一ツなり」と、いはせも果す正成嬉しけに打うなづき、「罪業深き惡念なれ共、我も斯様に思ふなり。いざや同じく生をかへ、此本懐を達せん」といひもあへず、をし肌ぬぎ、氷の刃一文字、脊骨をかけた引まはせば、宗徒の一族十六人、従ふ兵五十余人、我もくとさしちがへ、同じ枕に伏たりし、惜かりし惜むべし。日本無雙の名將の、最期の程ぞ潔よき。あひもすかさず

一作一趣向

御見も目に  
からう

おぼこ一處女

指一刺

重き小夜衣一さ  
らぬだに重きが  
上の小夜衣我妻  
なしてつまな重  
ねその歌による

大森彦七、大勢引具し込入て、一々に首かき落し、「ヲ、目出度し心地よし。拔ぬ太刀の高名、楠が首高氏公に奉らば、三ヶ國は取れた物。日比心を通はせし、勾當の内侍も坊門宰相が計らひにて、今夜我手に入筈。むまいことのつかみ取、早ふ内侍の顔が見たい」と云所へ、女房二人先に立、長持を昇入させ、「宰相殿のお使ひ」と、聞より彦七大きに悦び、彦七、満足く。人目を憚り長持とは宰相殿の一作。去ながらいとしい君の箱入、氣の詰るもおいとしい。先々御見と蓋をあくれば、恥かしけに薄絹深く顔かくし、籬の梅のはや咲の、雪に埋れし風情なり。彦七猶も心うかれ、「其おほこながなを味し。そさまを我が手に入んため、此度の軍も某が手を碎き、御覽候へ楠一家を討留たり。是より義貞が首捻切らんは、寐鳥を指すよりいとやすし。世になき新田に心中を立んより、日の出の我等になびかれよ。色こそ黒けれ心は伽羅。先我が陣屋へ同道して、新枕の酒もりせん。いざさせ給へ」と肩にかけ、二足三足は歩みしが、ア、ラ不思議や今迄輕き女郎の、俄に重き小夜衣、我妻ならぬ念力か、大磐石を肩先に、たよみかけたるごとくに、五體ちつ共働かず。彦七アアしれものごさんなれ」と、太刀に手をかけ振あをのけば、コハ如何、和田の新發意源秀、くはつと見開く眼の光り、二面の鏡研立て、額に

大磐石云々―太  
平記に大森が鬼  
女を買ひなる話  
の作り習  
手が悪い―仕方  
が悪い  
秋風―飽く事  
八文字―女の歩  
みに内八文字外  
八文字とあり是  
は外を云ふ

口へらザ―負け  
ザいよ  
出家侍 犬畜生  
―農工商の三民  
より相手にしが  
たことの謎

たまぼこの―道  
の枕詞

付たるごとくなり。大森わな／＼震ひ出し。こは／＼下にそつとおろし、辻人んとする所を、源是々彦さん手がわるい。幾瀬心を盡すとは偽りか。何處へいかんす。いとしかはいとはいはんした、言の葉はうそかいな。ヲ、しんき跡じよりさんすは早や秋風か」と、見あけ見おろす高入道。しやなら／＼の八文字は、二王をゆるがすごとくなり。彦七五體縮め共、弱味を見せじと大音上「ヤア／＼源秀智仁勇を兼ねしと云、楠さへ討取たる盛長、いはれぬ腕立せんよりも、腹をきれ」とぞ呼はりける。源秀今は堪られず。長持の棒をつとりのべ、源ヤイ禮義知らずの國賊、楠一族國の爲君の爲、死を善道に守て潔よく切腹せしを、何ぞや己れが、討止しなどとは、どの頬けたから吐出した。いざこい源秀が手なみを見せん」と討てかよる。盛長猶も口へらず「侍たる身が坊主を相手にする物か」と云捨て辻て行。源ヤア出家侍犬畜生餘すまじ」とほつ立／＼たよき立、八方微塵にうち立れば、あたりに近づく者もなく、皆ちり／＼に辻てけり。源さもそふすく。これより河内に立越。正成の最期を傳へ、重ねて義兵をあぐべし」と、甲斐なき首を取集め、怒れる眼にはら／＼と、涙貫きたまほこの、道は生田の森の露、するのしづくや末の世に、譽を永く傳へける。

## 第二

將の謀云々七  
書の三歸の文に  
て同書に利を勢  
に作る

將の謀洩る時は軍利なし、外内を窺ふ時は災ひ制せずとや。坊門宰相清忠が内通故、湊川の合戦破れ、楠正成討死すといへ共、惣大將新田左中將義貞、西の宮に御陣を召され、士卒を懐け給ひければ、馳集つて御方の勢、四萬余騎とぞ聞へける。侍所長濱六郎左衛門、松明持せ陣屋をめぐり、囚人四五人搦めさせ、義貞の御前に引据へ、曷彼奴ばら今夜近邊の田島を荒し、御馬の飼料に残せし青麥を、盗み刈取しを搦め取て候、見せしめの爲首切て、獄門にかけ候はん」と言上す。義貞聞召、「抑今度の合戦は朝敵を亡ぼし、民安全になすべしとの勅詔なれば、賣買耕作に妨げず、田島の一粒をも刈取者は急度刑罰すべきよし、諸軍勢に相ふれ、所々に立たる高札を背きしは、敵方のあふれ者か但盜賊か、白状させよ」と御説有。雜兵繩付ひつ立、「サア大將の御前成は眞直に申べし。僞らば首捻切らん」ときめつくる。甲「是々そこつなされな。我等も此國の大將」兵「ヤア大將とは」甲「いやく巾著切の大將剪刀の彌市と申者。或は花見の開帳の、又は傾國猿芝居、人立多き所にて、人の懷腰のまはり、手がさはるとこつちの物、資本い

成るは―成るよ

しよざいー論語の如在より来る、常の振舞を云ふ  
ひつしやりはん  
ひつそりの意か  
てんぼの皮ーま  
よと皮巾着にいひかく  
お根付ーお目付を巾着の縁に然いふ  
のどばるーのし  
上る  
しやつ面ーうぬ  
の面  
はりが過てー金を多くはりて贈する事に寄せたり  
どう取ー親か  
かるたー苺ると  
骨牌  
赤梅檀ー大なる  
借銭にかく  
手ぐら云々ー手

らすの商買。此軍始つて國中のよい衆は、わらんぢがけで遊ごしらへ、遊山所はいかなこと、我等がしよざいひつしやりほん。御法度を背きしは、いつそてんほの皮巾著お根付衆に咎られ、括られました」と申ける。兵其次成大男、己が面付たど者ならず、眞直に白状せよ。のぢばらばしやつ面を、はつてくはりまはさん」云、ア、余りはるく御意なされな。はりが過て此さま。我等は博奕のどう取、此比つどく不仕合、鍋釜燗つりお前、糖味噌桶迄はたけ出し、詮方盡て二三日、麥をかるたのかたにはり、ひねつてもく、二寸より上目なく、あけくに今夜三寸繩に縛れました」と泣にける。三番目は若き出家、兵三衣に似合ぬ麥盗人、子細を申せ」と睨付ける。丙「されば愚僧はあかしがた、蓮臺寺と云淨土寺の後住に、無海と申法師成が、學問のうきばらしに、ふと室の津へ出かけ、梅花のうつりをかぎそめて、抹香の匂きづまりさ。あくびは百八煩惱菩提、いつそお山に宗旨をかへ、好色修行と心ざし、通ひ詰た其あけくが、それはいかい赤梅檀の、阿彌陀佛迄質屋へとばし、手ぐらまぐらに調のへ、今少に手づかへ、ふつとした出来心、後悔先へたよきがね、只今斯様のせめ念佛にあふことも、出家の身にはあぬまいこと。あぬまいく、ア、ぬまいだ」とぞ語りける。遙の跡に年の比、廿余りの女房、

暗目暗なり(假言集覽)  
あぬまいある  
まいを南無まい  
だに似せて語尾  
とす  
往還—大道

我妻—我夫、次  
にあらるも同じ

盗み取たる青麥を、背に縛り付られて、恥かしげにぞ泣居たる、義貞つくく御覽じ、  
「彼が躰盗すべき者共見へず。子細ぞ有らんまつすぐに申べし」と有ければ、女ちつ  
共騒がず、「ハア、子細と申て麥を盗みしより外の子細もなし。はやく法にをこなひ給  
へ」と、恐れもなげにぞ答へける。義貞猶もいぶかしく、義子細をいはずんば往還にさ  
らし、諸人に恥を知らすべきぞ」との給へば、女は「わつ」と計にて、暫し涙にくれけ  
るが、「ア、是非もなや。盗みをするも夫の恥、包まんと思ふ爲成に、諸人に面をさらさ  
んこと、恥を招くか情なや。然らば包ます申べし。わらはが夫は足利高氏の相傳の侍  
成が、聊のこと有て主親の勘當受、此國の土民となり、忍びて暮すうき身にも、此度の  
合戦是屈竟の時節到來、おゆるしなく共戰場に馳加はり、分捕高名譽を顯し、主の不  
興父ごの勘當ゆるされんと、思ひ定めし我妻の、心はやたけにはやれ共、鎧一領有にこ  
そ、手綱ゆりかけ乗つたり共、一町もとばぬ野飼の瘦馬、住もわびしき薬屋の窓より、  
関の聲矢さけびの音、かすかに聞ゆる其時は、齒ざしみしての無念がり、傍で見るとへ  
胸せかれ、己れやれ二世とかはした大事の男、此まよにては果させじと、様々に思案  
し、麥を盗んで兵糧の、便よくは陣所に忍び、寝入たる軍兵原が、太刀物具思ふまよに



盗み取、我妻に打著せ、みづからも太刀脇ばさみ、夫婦諸共軍して、名を後代に上べしと、思ひしこともいたづらに、かゝる繩目にあふことも、夫の武運の拙なき故。子細と云も此あらまし、とてもながらへ果てぬ身ぞ、憂物思ひさせんより、はやく殺して給はれなふ。御慈悲成は人々」と、聲も惜まず歎きしは、目も當られぬ風情なり。義貞もやゝ落涙有、「チ、あつばれ武士の妻にて有けるよ。命がけの盗して夫の武勇を勵ます心感じて猶余り有。罪をゆるし義貞が、著捨の鎧太刀をもそへて取すべし、夫々」との給へば、御召替の鎧の直垂、金作りの一こし、女が膝にぞ置れける。眞「サア、歸つて物具著、明日の合戦には、義貞が陣に向つて打てかよれ。敵ながらも見物せん。はやとくく」との給ひて、いましめの繩を解せらる。女は「アツ」ト頭をさけ、「情有御大將、有がたき御恩の程、何と報じ奉らん。去ながら、我妻はまさしく高氏公の御家人。すは合戦に及ばんとし、今給はつたる鎧を著し、太刀を持って義貞公に向はるべきか。用捨しては高氏への不忠。是非なく一矢仕らば、恩を知らぬ弓取と、末代迄の笑ひ草、御恩は却てあたとなる。只御慈悲にはみづからを、盗一べんの科に落し、はやく殺して給はれ」と、首さしのべて泣き居たる、心の中こそすどしけれ。義貞猶も感じ給ひ、「チ

假名實名一假名  
は苗字にて實名  
は本名を云ふ  
(瑠璃天物)

立かちみー立つ  
にかり 引きの  
縁語

中黒一新田の  
紋、二ツ引兩は  
足利巴は小山宇  
都宮輪違は高の  
紋所

ヲ其心を祭してこそ、わざと最前より夫が假名實名をも尋ず、互に知れず知ぬ相手、名  
 乗て勝負を遂る時、何れに用捨の有べきぞ。さ程の事を汝等に、教らるゝ義貞ならず、  
 いらざる詮義に時遷れり、早々歸れ」と太刀鎧、手づから取てたびければ、をし戴きわ  
 きばさみ、女お情は是迄、明日の合戦には、夫婦諸共心を合せ、恐れながら御運によつ  
 て御首を、給はることも候べし。おゆるしあれ御免あれ」と、御前を罷立かゆみ、ひき  
 はかへさじ武士の、妹脊の義理ぞ三置頼もしき。既に其夜も明行ば、勝にのつたる高氏  
 の軍勢雲霞のごとく、湊川より打てかゝる。義貞も西の宮より取てかへし、生田の森を  
 後にあて、入亂れ責戦ふ。太刀のつば音ときの聲、いか成修羅の鬨諍も、是には過じと  
 おびたどし。小山田太郎高家は、心計は春の花、身は埋木の力なき、野飼の馬の繩手綱、  
 ちぎれ具足もあらばこそ。あまつさへ女房の、夕部に出て歸らぬは、心もとなさ氣遣さ、  
 足に任せてこよかしこ、所在を尋求塚、小松原より振返れば、コハいかに、遙向ふの山  
 山に、中黒のはた二ツ引兩、巴の旗も輪違ひに、東へなびき西へなびき、磯山風に翩翻  
 して、馬煙矢さけび天に響き地に満て、新田足利の國争ひ、今を限りと見へたりける。  
 小ア、うら山しき殿原が合戦や。せめて古具足の一領もあれかし。取て投げかけ何百萬騎

貧は諸道の妨  
貧は總ては差支  
へる罷

矢留り―鎧の弦  
走の上部  
押箸板―鎧の後  
の肩にあたる板  
高紐―鎧の上部  
錦がみにある胴

が中なり共、只一揉に駈破り、兩陣の目を驚かせん物を、何をいふても浪人の。紙子頭  
巾に鋤壹丁、思ふに甲斐のあらばこそ。貧は諸道の妨と、世のことわざも我が身のうへ、  
エ、無念口惜や」と、こぶしを握り牙を嚙、男泣にぞ泣居たる。かよる所へ女房は、危  
き命をまぬかれ、ふつてわいたる太刀鎧、夫に見せて悦ばせんと、足早に歸りしが、  
鬩ヤアこちの人爰にか。此身装は何ぞいの。さぞ待かねてと有ふと思ひ、いきせきして戻  
つた。是わしじや女房じやが、なぜに物いはんせぬ。氣合が悪いが高家殿」と、抱きお  
こせば涙をおさへ、少ヲ、氣合もどふでよふはない。ヤレ女房あの向ふの山々に、入ち  
がふ簇を見よ。今ぞ合戦眞中。あの軍中には主君高氏公、父前司殿もおはすらん。正  
しき主君老たる父が、天下別目の晴軍と、命を惜まず戦ふを、子の身として安閑と、見  
物して日を送る。是が無念に有まいかと、いはせも果す、鬩コレくく、其泣事は  
もふいらぬ。是見さんせ」と、太刀鎧投出せば、高家横手をちやうど打、鎧引よせつく  
づく見て、矢留り金物押箸板、發傳高紐上巻付、太刀は鳥首兵庫ぐさり。少ム、是は大  
將の拂物、大抵では賣まじきが、但損料でばし借つたかと、いへば女房くつくくと吹  
出し、「ア、つがもない。日がな一日たま綿くつて錢廿取や取ぬもの、八百年の手間賃で

釣の紐  
上巻付一押付の  
下にある板に上  
巻の縄をつく

さもしい一卑し  
い

あはよく一機會  
よく

も、中々買ると物かいの。馬の草もなき故に、昨夜義貞の領内の、青麥盗み蒞たるを、番の者に搦られ、殺さると筈成を、さすが義貞は憐を知つた大將、夫の身の上聞届、命を助け其上に、此太刀具足。サア早ふ出立て、手柄してござんせ」と、わたがみ取てきせんとす。高家つきのけ、「ム、誠に義貞は五常を守る名將、物の憐れをしること、敵味方の隔なき人と聞。義貞に囉ふた鎧を著し、直に義貞に打てかゝらんこと、心よからぬ軍なれば、思ひ切たる高名も成べからず。エ、よしない情を受たり」と、くやみ顔にぞ見へにける。斐「エ、こなた共覺えぬ。義貞程の大將が、さもしい返報受ふとて、何の情をかけられぬ。それ故こなたの名も問ず、用捨なく我をうて、と詞に念を入給ふ。義貞の目の前、此具足著て働き、あは能ば義貞をしてやらふと思ふ氣はないか。エ、をくれた人や」とせきければ、少ム、分別した合點有。一度著して見せずんば、其方をかたりなどよさみせられんは男の恥。サア小山田太郎高家が出陣」と、鎧取てなげかけ、上帯高ひも小をどりして、引しめく、太刀わきばさみ立あがれば、斐「ア、あつばれ武者振よい男、わしも馬に草かふて、追付そこへ」と立歸れば、斐「是討死は軍の習ひ、いきて歸れば仕合。先今生の暇乞、必泣くな」斐「コレ武士の妻に成からは、そこは合點」少「死

正なふーきたな

こがらしー風にて  
秋々吹く暴風  
かゞせー案山子  
弦走ー鎧の腹部

出の山路の一二のかけ、をくれはせまい」とわかれしは、はや修羅道の先陣と、後にぞ思ひ三重しられける。傾く日蔭西の宮、大手の合戦入亂れ、人馬四方に馳ちがひ、喚きさけぶ其聲は、山を崩すが如くにて、官軍既に戦ひ破れ、堪へつべふは見へざりけり。大將義貞只一騎、返し合く、十六度迄驅散し、御身をきつと見給へば、數か所の矢疵馬鞍に立し矢は、枯野の薄にことならず。義、エ、軍の勝負今日に限るべからず」と、追くる敵を切はらひく、求塚の小松原、心靜かに打給ふ。高家其ぞと見るより大音上、「大將軍と見奉る、正なふ後を見せ給ふ。引返して勝負あれ」と、をつかくれば振返り、義「日本一の義貞に、聲をかくるはござかし」と、鎧にかけてはつたと蹴散し、たゞよふ所をひらりと飛おり、片手をのべ一突つけばこがらしに、かゞせのたをるゝ如くにて、横なけにどうど伏す。義貞すかさず弦走りにのつかより、首をかよんとし給ひしが、鎧出立つくぐくと御覽し、義、ム、ウ天晴をのれはしれ者哉。義貞にやすくと組しかれん力とは覺えず、何とて我を組しかぬ、定て子細有べき。去ながら汝が主の高氏を組伏せたらんはしらず、汝ごときの侍を、五十百首取ても、さのみ義貞が手柄本望共思はず。サア子細を語て名のれく」との給へば、少コハ御錠共覺えず、いかに大將なればとて、

わざと敵に組しかるよ者や候べき。足利高氏の家の子小山田前司高春が一子、小山田太郎高家、不足の敵とおほしめさば、只首打てすてさせ給へ」と、兩手をゆるめて働かず、  
 巽いやく此物の具は夜前女に與へし義貞が著捨の鎧・扱はその夫よな。恩を報ぜん心ざし、しほらししやさしさよ。さりながら天下にくらぶる義貞が命、僅の鎧一領にて助からんとてはとらせぬぞ。主親の勘當に付望有者と聞く。目を驚かす高名して、本望を達せよ。只今にても駈返し、義貞と今一勝負、せばせよかし」との給へども、小山田は涙にくれ、「重々の御情其加の程も恐ろしく、申上る詞もなし。いふに甲斐なき此高家が

かせくびーかせ  
 は碎にてやせ首  
 の事(俳言集覽)

かせくび、義貞公の御手にかより申こと、いかなる先陣さきがけにも、勝つて身に過たる譽、勳氣の父が聞ならば、さぞ悦び申べし。此上の御芳志に、はや首打て捨させ給へ」と、申切たる兩眼に、涙を流すぞ道理なる。巽エ、義理ばつたるおのこや」と、取て引立塵打拂ひ、「義貞に助けられしと人に語るな、我も人には語らぬぞ」と、手負し馬を引立て、靜に打て過給ふ。武將の氣質備つて、古今に語るもことほりなり。小山田は茫然と、義貞の仁心こよろにしみて立たる所に、大森彦七盛長手の者五十騎ばかり、どつと驅寄大音あけ、「赤地の錦の直垂、中黒の鎧は、敵の大將義貞、遠目にも見ちがへず、

さしつたり一オ  
イ合編

十善一前世にて  
十惡を犯さぬ者  
現世にて帝とな  
るとの佛説

射取やくと矢先を揃へ、よこぎる雨と射かくる矢先、少さしつたり」と小太刀をぬいて、はらりくと三重切落す。され共鎧のすきまへ、矢づくめにすくめられ、「今は是まで。我義貞の命にかはり、其ひまにやすく落し、情の恩を報ぜん」と、求塚に驅上り、少遠からん者は音にも聞け、近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞、十善天子に頼まれ參らせ、屍を戦場の土に埋む、功ある大將の最期のてい、よつく見をいて手本にせよ」と、たかひも切てとく所を、大森主従おり重り、きりふせく、をさへて首をぞかいたりける。直垂切てをし包み、「官軍の惣大將新田義貞を、伊豫の國の住人、大森彦七盛長討取たり」と名乗しは、いかめしうこそ聞へけれ。此聲に驚き、馳散たる味方の勢、「大將を打せては、壹人もいきて詮なし」と、八方より引返す。義貞も取て返し、義ヤアく同士討する狼狽武者。誠の義貞是にあり」と、切てかより給へば、義貞ヤ義貞が二人あるものか。新銀古銀同じ通用是で堪忍仕ると、一散に逃て行。味方の大勢追驅るを、大將をさへて「しばらくく。彼は聞ゆる佞人、愚痴愚蒙の狼狽者。かよる者の敵陣にあるは、味方の利運ぞ」と、諸卒を示す謀智謀は居ながら天に入る。波をもくどる尼が崎、山崎過て名將の、譽は雲井の桂川、打ち越かけこへ渡りこへ、世に

我立袖一比叡山  
を云ふ都の富士  
も然なり傳歌の  
歌と伊勢物語の  
歌による

木主一文王の位  
牌  
義弟一義帝の  
義帝は楚懷  
王の孫、何れも  
君を奉じ民心を  
得天下を取る例  
(史記)

とざま一譜代の  
臣ならざる者

三枚甲一三枚に  
かけて鏢三枚あ  
る兜をいふ

立ちこへてならびなき、我立袖や都のふじ、西坂本にぞ入給ふ。

第三二

周の武王は木主を作つて殷の世を傾け、漢の高祖は義弟を尊んで秦の國を亡す。されば高氏將軍天理を恐れ、後伏見の院宣を申給はり、朝敵の名を免れ、忠戦の鋒先鋭くして、兵庫湊川の合戦に打勝、楠正成に腹切せ、新田義貞を驅散し、馬鞍休め物、具も、ぬぎて紐とく花の都、東寺を假のやかた城、大將の御所とぞ定らる。猶も殘黨洛中を犯すこともやと、口々の警固怠らず。生殘る義貞一家、重て討手に向ふべし。先々軍の疲をはらし、樂を諸人と共に樂しむ酒宴の興。此度の合戦に、分捕高名の帳面を開かせ、夫々に御褒美ある。仁木細川吉良石堂、南部桃井高上杉、武田赤松島山、澁川岩松一色荒川小笠原、此人々を始として、とざまの大名小名御家人は云に及ばず、雜兵葉武者に至る迄、たち刀馬鎧、金銀時服の御褒美、昨日今日の足輕も、知行の感狀給はつて、首一ツが一筆に、千石に成も有、數にもあらぬ首とつて、御褒美を貪れ共、僅銀子三枚甲、拾ふて著せてもあきらけき、名大將の賞罰と、あをがぬ人こそなかりけれ。爰に大森彦



矢ぞくめ一矢を  
放ちて動きのと  
れぬ様にする

にたく敷云々  
一律僧正成等の

七盛長、腹巻に直垂うちかけ、もみ烏帽子引たて血まぶれの甲箱御前にさし出し、彦敵  
の大將楠討死の後、總大將新田義貞西の宮の軍破れ、味方の多勢に取巻かれ、求塚の上  
にかけ上り、腹きらんといたせしを、某矢ぞくめにして討伏首取て候。残る軍兵落行所  
を、播磨路迄追かけ申せし故、御帳にも付申さず、只今實檢に供へ候」と、蓋を取れば  
錦の直垂、袖をちぎつて包みしは、大將軍の首のしるし。伺公の諸武士横手をうち、「扱  
は義貞を討たるか、今度の譽は盛長一人。弓矢の冥加に叶ひし侍、お手柄くあやかり  
者」とぞうらやまる。高氏卿しばらく思案し給ひ、「錦の直垂を著し、新田左中將義貞と  
名乗たるを、夫ぞとして討つらめ、其に虚言も有まじ。去ながら此高氏も義貞も、同  
じ濟和の後胤、八幡殿の嫡孫、敵味方とはなつたれ共、ともに一家の源氏の棟樑、殊に  
天皇に頼まれ參らせ、官軍の惣大將、相隨ふ門葉に、大館大井田里見烏山、大島堀口脇  
屋のれきく敷をしらず。譜代重恩の武士も多かるべし。義貞程の大將が討死せんに、  
我さきにとかけ合、冥途の供とて一人も討死せぬさへ不思議成に、残る軍兵播磨路迄逃  
けたるは心得がたし。一とせ楠がやけ首を以て欺き、義貞の智略に乗られ京童の笑草  
にたく敷首共をまさしけにもかけたり」と、落書を立られ六波羅の愚將共が、恥か

死骸を求むと欺  
きしを賊兵眞と  
し似た首を曝し  
しを或者は似  
た首なり、まさ  
しげにも書きけ  
る虚事説と落書  
したり（太平記  
十五）

いはんずな一い  
はんとするな

きしと聞及ぶ、彼等は天性武略智謀備へたる英雄、引も駈るも理に當り、生るにも死ぬるにも、勝負の損徳を守る名將、いか成謀をやかまへつらん。卒爾にもてはやし、義貞にてなくんば味方の恥辱は云に及ず、汝不覺人の名を取べし。かたぐ、如何思はるよ。評定あれ」とぞ仰ける。大森つよと出で、「いや御評説迄もなく、生どりの者に見せ、御尋候はど、實否早速知れ申にて候」と、こざかしげに言上す。高氏大きに笑はせ給ひ、「イヤ生捕に問などは、名もなき者の首のこと。命を捨て働き入、生どらるゝ程の者なれば、よつく大將義貞に忠信深き侍よ。とはれて誠を云べきか。若御邊運盡き敵に生どられ、味方の謀を問ふならば、有の儘にいはんずな、覺束なし」との給へば、盛長は詞なく、赤面したる計なり。大將重て、「我義貞と一家なれ共、使者の通路計にて、終に直に對面せず。見知たる人あらば、申されよ」との給へば、諸大名立よりく、「關東以來此度の合戦にも、遠目に見たる計にて、近付しことなければ、おほろけのことは申されず」と、更に實否は極らず。小山田前司高春、末座よりのび出て、見ればおもざし顔のかより、若年の昔勸當せし、我子の小山田太郎高家に、似たりと見たる親子の縁、六十の老眼にも、紛ふかたなく胸にしみ、はつと驚ろき居たりしが、さあらぬ躰

とこのへーよき  
に取成す

生良云々―竹田  
出雲、手習鑑に  
此句を用ひたり

に心を沈め、新新田殿の御良は、先年鷹狩の折柄、一兩度も見参らせ、大かたに覺候」と、近々と立ちより右へまはり左へ向、ためつすがめつ、見れば見る程疑ひもなき我子の高家。南無三寶、勘當して十八年、此世にながらへ有ならば、此度の合戦に、大將の御目に及ぶ程の高名せよかし。夫を品に勘當ゆるし、御前もとよのへ老が世の、子孫の榮を見ん物と、頼し心の綱も切、そごる涙のこほるとを、「ハア、老眼のかすみさだかならず」と、目をおしのごふ其中にも、當家譜代の身を持て、敵の大將義貞と、名乗て死せしは心得ず。申詞にさしあたり、前後にくれたる計なり。大森彦七つよと出、「是々前司殿、生良と死良は相好の變る物。其了簡して大概似たらば似た通申し上られよ。凡道具の目利でも、只一言で千貫の道具が似せ物に成ことも有。粗忽いふて盛長が、高名を消まいぞ」と、色をかへてぞ申ける。前司重て御前に向ひ、「面儘よく似たるとは存すれ共、某が心にて決定しても申されず。所詮一條一路の獄門にかけ、諸人の噂をうかがはど是非明白に顯はれ、義貞に極らば、味方の勝利盛長が高名、もしさもなき首にて候はど、六十に餘る前司めが、粗忽を申て面目なしと獄門の木の下にて、腹かき切て伏ならば、恥は某にとどまつて、盛長が不覺もなく、味方の恥辱も候まじ。此實否をたどすこと、

人性一人情

そこみなく一底  
意包まづ

うたてや云々一  
此意は小山田の  
妻狂女となりて  
夫の首の下にて  
啣つさま、其意  
は柳はもと直な  
れども風之を挽  
む我心も戀の爲  
に狂ふと也

某に任せ下さるべし」と、望み申せば高氏卿、「然らば兎も角も計らふべし。去ながら都方は義貞ひいきの萬民、詞も直には受がたからん」との給へば、煎さん候。壽永のむかし、木曾殿北國合戦に、手塚の太郎光盛、齋藤別當實盛が首を取しか共、名乗らねば名もしらす、見知ル人もなかりしを、樋口の二郎が朋友のよしみに語りし詞の色、染たるすみのびんひけを、洗ひて夫とは存じて候。友達のよしみにさへ、心をあかすは人性のならひ、殊に義貞は情有、大將、よしみの者も多かるべし。北の方は勾當の内侍と申す内裏上臈、かくと傳へ聞給はゞ、忍ぶに余る涙の袖。諸人に紛れ給ひても、思ひは外の色に出、其かくれ有べきか。實盛がひけを洗ひしは、夫は篠原池の水、是は情のそころなく、誠を顯はす涙の水に、誦洗はせて御覽候へ」と、申もあへず首を持御前を立ちり。三置

狂女うたてやな是御覽ぜよ。今迄ゆるがす折てかたけし此柳、風のさそへばこそ一葉も散るなれ。たましく心すぐなるを、戀こそ我をくるくるはすれ。風狂じたる秋のはの、萩のをとづれ今かくとたのものかりよ、歌君が玉づさつばさにかけて、我手に渡せ渡せやわたせ八はしの、澤邊ににほふかきつばた花あやめ、にたりや似たり新田と聞ケ

秋のは―秋の草  
木の葉にて爰は  
男の音信を待ち  
焦れし様  
八橋―斐河に  
り  
かきつばた一似  
たりや似たり杜  
若の謠を取れり  
なるは瀧の水―  
延年舞の歌、と  
うたりは流れ落  
つるさま

雞籠山―唐山通  
城縣の南にあり  
夜靜なる時常に  
鼓の聲すと云ふ  
(大明一統志)

ばなつかしやなふ。ヤアくわらんべ共は何故に立ちさはぐぞ。何新田左中將義貞と云  
大將、軍に打負敵に首を取られて、獄門にかより給ふとや、あら誠しからずや。其中將  
と云人は、本より弓馬は家の藝、雲のうへ人に交りては、歌連歌の道にも達し、鞠は曲  
鞠の品々迄くらからず。又酒もりなどの折柄は、謠いで人々に亂舞舞て見せんとて、  
水干直垂取出し、衣紋美しう著ないて、へりぬり取て打かづき、手拍子人にはやさせ、  
扇をつ取「なるは瀧の水、たへずとうたり、たへずとうたり落くる瀧の、音羽の嵐に地  
主の櫻はちりくく」ア、淺ましやちるは櫻かふるは涙か誠にあれよ、あの獄門こそ涙の  
種。めぐりに嚴しき鑓長刀、劔の枝のさかしき中の、梢にしほむ花のかほばせ、目もふさ  
がり色かはる共契りは變らじ。我こそ妻の勾當の内侍。何なふ内侍と召るよかや、いで  
參らふ。思ひ出せばはやむかし、人目忍ぶの袖打かざし、あひそめし夜の睦言も、語り  
つくさぬ鐘のこゑ、雞籠の山にひゞきて、森の小鳥八こゑの鳥。歌、曉の明星が、西へ  
ちろり東へちろり、ちろりくとする時は、扇をつ取刀さいて、往ふよ戻ろふよといふ  
ては妻戸に佇みし、ゑにしなきりよんな。君が心に秋風吹ば、いなふ共戻ろふ共、何共  
其方の御計らひと、いふては小腰に抱つきて、むすぶの神の中立は、比翼連理も磯枕

葛葉―風吹けば  
裏見するもの故  
宇津山―殿河に  
ありて葛葉茂り  
し故に亂るの序  
にもけり  
兒の襟を云々―  
夫を思餘り幻に  
立つさま

妻―夫

伊勢の濱萩―古  
歌に物の名も所

くちせぬ中を葛の葉の、怨は風のとがもない物。誰が手にかけて宇津の山、薦の葉か  
づらみだれそめ、くるひ出たる 歌 我身は何とならの葉の、露よりうすきおなさげや。  
宵は待かね夜中は歎き、曉起きて空見れば、兒の様な傾城が、むらさき 盃手にすへて、  
一ツ參れ我殿、二ツ參れ此殿、三ツめの肴には、白瓜からうりから梨子から梅、西王母  
がそのよ桃、百とせ千年の御命、情なくも失なひし、謠そも修羅の敵は誰ぞ、大森彦七  
盛長とや、妻の敵いざ討ん。持たる柳を劔と定め、瞋恚の焔はこがるよ紅葉、いふに甲  
斐なき狂女なれ共、夫の弓矢のはけしき嵐に、なれてもまれて、四方の櫻の四方へばつ  
と、よりくる警固、さす手も引手も武士の、物狂ひとて咎むるか。よし咎めても威しても、  
歎きても口説ても、獨りは歸らじ我妻たべ、夫たべなふ人々」と、かつばとふして泣沈  
む、涙の袖も黒髪も、亂れ心ぞ憐れなる。警固の下部棒振廻し、「騒敷氣違め、そこ立退」  
と追拂ふ。前司押へて、「さなせそく云事有」と立ちよりて、剪扱は義貞の北の方にて  
ましますな。いかに狂氣し給ふ共、年月なじみの夫婦の中、かほばせも忘れ給ひしか。  
心を沈め能見給へ、義貞にては候まじ。歎を止め歸り給へ。しやうだいなや」と諫む  
れば、馬うたての人のいひごとや。伊勢の濱萩浪花の芦、所にかはるは草の名よ。異國

けりてかはり  
けり浪花の葎は  
伊勢の濱吹  
氣遠一匙  
あはれ一泡

おどろ一亂髮

秋より先に云々  
一謡曲班女にあ  
る句にて夕にい  
ふをかく  
さらしな一鼻す  
にかく

はしらす本朝に、名もひとり身も獨り、又と一人はなき人成を、さもなき首を何故に、  
墨くろくくと高札に、新田義貞としるしたる。其方こそ狂人よ。我は元より氣違の、こ  
ほさぬ水のあはれをしらば、さのみ人目にさらさず共、あの首をわらはにたべ。煙とな  
してなき跡の、菩提を弔ひたふさふらふ」と、袖にすがりて歎かるよ、眞チ、御歎きと  
いひ、御不審はさることなれ共、此首は盛長が討ちは討つて候へ共、義貞とは見へがた  
く、外に似たる者の有故、さらして實否をたゞさん爲、かくの通」と云所に、東の辻に  
人立して、是も女の物狂ひ、まゆかきくもり黒髪も、おどろにばつと、ふりかたけたる  
笹の葉の、亂れ心やくるふらん。女あらはどかりや、恐れをしらぬ京わらんべ。忝も  
我殿御は、源氏の大将左中將義貞、参内の道そこのけとこそ。歌「なつかしや我妻の、雲  
井を出しは卯月の空、秋よりさきにならずと、夕の数は重れど、こぬ夜つもりうら  
めしや」獄門にたがさらしなの、月日待しもいたづらごと。後世とぶらひみづからも、  
死出三途をとまははん、御首たべなふ警固の人、お情あれ人々」と、獄門の木に抱き付  
人目もわかず泣給ふ。以前の狂女走りより、「是義貞殿の妻と云御身はそも何人ぞ」女、チ  
ヲ聞も及び給ふらん、勾當の内侍とはみづからよ」耳「イヤ實の勾當の内侍とはわらはが

思ひ者一妾

海嶺の板一高紐  
を切られぬ爲に  
錦上に懸くる  
板、冠板は其上  
部  
大立擧一惣體鍔  
製の膳當

しゆみ一須彌山  
四天王一帝釋天

事。御身は定て思ひ者か一夜妻、かりの情を忘れかね、跡迄慕ふはやさしけれ共、菩提をとふは本妻の役、お首は我に下され」と、をしのくればをしのけて、女さいふ御身が一夜妻か遊女か。筋なきことな申されそ。勾當の内侍とは大内の女官御代にたつた一人の女。義貞殿の本妻我ならで誰あらん。物に狂ふも夫故、本性はたがはぬぞ。サア誠の内侍ならば義貞殿の参内の出立有様覺しか、忘れしか。よもや知らじ」との給へば、耳なふ忘れんとすれど忘れぬ、其出立は紫裾濃、栴檀の板冠の板、金銀にて中黒の、しるしをうつて金札、大立擧の膳當、こがね作りの太刀かたな、赤地の錦御著長、わらはが取てきせければ、ゆつて上帯ちやうどしめ、につこと笑ふて、義「あつぱれ我ながらも弓取かな。今日の軍に響を得て、名を末代にとどめん」と、馬引よせゆらりとこのつたるはなふ、大將軍にまがひなし。近づく敵のときの聲、味方にとどろくせめつどみ、みねのこがらし磯打波、よせくる勢をまくり切、大敵を見ていさむこと、荒鷹が雉を見て、鳥屋をくどるにことならず。雨やあられと飛くる矢さき、あがる矢にはかいくどり、さがる矢には飛上り、向ふてくる矢は小太刀をもつて、切ては落し受ては拂ひ、はらりはらりと切拂ひ、しゆみの四方の四天王、魔醜修羅が放つ矢を、一度に切て大海に、拂ひ



の外臣にて持  
國、増長、廣目  
多門の四天が修  
羅と戦ふさま  
盡弓―槻弓にて  
盡きにかく  
はしたなし―不  
都合

その原や―藪原  
や伏屋に生る露  
木のありとは見  
えて逢ぬ君かな  
の歌による

關奢待―奈良正  
倉院に納まりし  
名香の名

落すが如くにて、面を向る敵もなし。かよるゆゑ敷武士の、運盡弓も矢も折て、修羅の  
奴と成給ふ、後世弔ふ者は我計」と、獄門に取付ば、後玄イヤ〜其は軍の出立。大  
内の事を知らぬ身が、内侍とはいつはり」と、引きのけてはわつと泣き、をし退てはわ  
つと泣き、籬の菊の狂ひ咲、花を争ふ蝶鳥の、露にしほると如くなり。前司聲をかけ、「エ  
、はしたなし先しばらく」と、二人を左右へをし分々、「首は一ツ内侍は二人、是非一人  
は偽なり。是跡にきた上臈、義貞と札はうつたれ共、うたがはしきこと有。心を沈め  
て能御覽ぜ」と、獄門を取おろし、見するもあへなき生首をなまめく膝にかきのせて、  
一目見てさへなれし夜の、面影だにもまがはぬ物。能々見ればその原や、有とも知ぬ死  
顔に、ぞつとこはさの「ア、恐ろし」と、拂ひ退て身を震はし、玄いや〜是は人たが  
ひ、目元口元義貞殿には似ても付ず。かねて我妻の給ひしは、「軍は時の運、いつ討死も  
はかられず。敵に向ふたびごとに、帝より給はりし、關奢待の名香、内甲にたきしめん。  
鬢の髪に名香かほる首取たりと云人あらば、義貞が討死と思へ」との御詞。軍の騒ぎに  
淺ましい、下臈の首と取ちがへ、誠のお首は勿躰なや、草むらにうづもれしか。尋てた  
べ人々と、歎き給へば以前の狂女泣出し、「エ、口惜や、いかに見しりなきとても、下

小心子心

藤の首とは余りぞや。我夫は身貧にて、名香はたかね共、弓取の心の花は、梅櫻よりか  
んばしく、仁義に命を捨し物。かばねに恥を與へるか。情なやいとほしや」と、首だき  
よせて伏轉び、聲も惜まず泣居たり。前司飛かより、取てつきのけ、首のたぶさを搦ん  
で、涙をはらくと流し、眞六十の老眼に見しも違はず、我子の小山田太郎高家にて有  
けるよ。おことは連添女房な、我こそ彼が父、足利高氏卿には譜代相傳の御家人、小山  
田前司高春生年六十七歳、命ながければ恥多しとは、我身の上知れたり。十八年以前  
彼奴は其の時十二歳、猪狩の御供せしに、年ふる猪の峰こすを、誰か有あの猪射留よとの  
御説。太郎ござかしげに小弓に矢をはけ向ひしを、高氏はつたと睨せ給ひ、「小腕にて仕  
損せん。罷しされ」との給ひし、御詞も終らぬに、弓と矢大地へ投付しを、彌立腹ましく、  
誰に當つて投げうち。年にも足らで慮外者。親前司はなきか、あれ引立よ」と御いかり。  
夫より君の御不興なれば、親も則勘當して、十八年の春秋は、風の便も絶果し、首も  
性あらばよつく聞。世間の親の勘當は、遊女博奕大酒の沙汰、夫さへ親は子を思ふ。小  
心にも弓矢の道、主君に向て意地を立たる御憎しみ、親の身では憎い半分嬉しいが又半  
分の勘當ぞや。今度の軍に義貞方の名有兵、首取て來れかし。君の御前は云に及ず、天

あをる一馬上にて  
降泥を打ちて  
急がす

下の武士にほめさせ、我も世上の親たる者にうらやまれん。今やくるくと毎日の高名帳、夜は繰つて翌日を待つ。親に孝なく義も知らず、所領恩賞に恥をかへ、敵に手をさけ膝をつき、義貞に降参し、知行に命を捨しよな。逆も捨る命をなぜ高氏に奉り、名の爲には捨ざりしぞ。親は年よる子は犬死、小山田の名字のほまれ、誰が末の世に残すべき。エ、淺ましや」と齒嚙をなし、持たる首をかつばと投、どうど坐して泣けるが、「思へば汝は義貞の郎等、我は高氏の御家人、親子ながらも敵味方、首成共一太刀」と、上振て打かくる。女房すがつて「なふ悲しや、内侍様もとめてたび給へ。親の勘當受し身は、未來もやみに迷ふと聞。勘當御免なき上に、親の手づから子の首に、刃をあて給はど、迷ひのうへの迷ひなり。最期の様を聞分けて、免しのお詞かけ給はど、名僧智識の引導も、夫にはなどかまさらん」と、口説立てく、歎けばさすが親心、「いふことあらばはや語れ」と、むせび入たる計なり。女房猶も涙にくれ、「いたはしや我妻の、今度の軍は高家が、主親の勘氣をゆるされ、昔にかへるは此時と、軍兵にまじり幾度か山給へ共、牢人の貧しき身、鎧一領あらばこそ、すはだ武者の鑄刀、拾ひ弓に拾ひ矢、畠につかふ野飼の馬、うて共あをれ共かはねば瘦て足立す。いか成猛き武士の、三條小鍛冶

かばふー助け守  
るうー凱  
五

が劔にも、なふ貧苦の敵は防がれず、腹を切んとし給ふを、わらは様々力を付、兵糧秣の心ざし、盗みかよりし青麥の、畠は敵の領内、高手小手にしばらく、大將の前に引出し、罪に沈むはづなりしに、敵ながら義貞は、情有、大將、身の上を聞届ケ、命たすかる其上に、召がへの錦の鎧、太刀刀迄給はり、「此恩有とて、必我をかばふな。夫故夫が名は問ぬ」と、仁義深き御詞、かたり聞せし我妻の、心魂に染たるか御命にかはり、「我源の義貞」と、名乗てあへなく討れ給ふ。たとへ千金萬金を、のべたる鎧太刀にもせよ、高家程の侍が、うへに望んで死すればとて、鎧一領太刀一振に目がくれて、そもや命が捨られふか。是ぞ誠の情の死とは夫のこと。恩を忘れ義貞を討參らせ、高氏公より大國を給はつて、榮華を極むる果報より、義理と情に命を捨、獄門にかよるこそ、武士たる者の果報なれ。おいとしや御最期迄、心にかよるは父御の不興、御免有との一言の、息をお顔に吹かけて、親子の縁を二世迄も、結んで進せてたび給へ」と、すがりかきよせいだきよせ、きえ入く泣ければ、内侍も「扱は我妻の、命の親ぞ」と諸共に、聲をそろへてかこちなき。警固の匹夫下部迄、袖をしほらぬ者はなし。父の前司も愁歎の、涙にかきくれるたりしが、「エ、あつばれ我子やでかしたり。只残多きは十二歳より、一日安

はちげんはなつて—廣言して

あらし—あらしと嵐

譽—夫義員  
弘誓—佛の衆生  
濟度—舟に譬ふ  
舟岡山は火葬地

まだしき—盛り  
に至らぬ事

堵の思ひもなく、貧苦でしなせし可愛さよ。情にせよ義理にもせよ、義貞を助けし子の親は、主君高氏へは不忠の者、奉公すべき理窟なし。御前にて此首が、義貞にてなき時は、獄門の木の下にて、腹切て伏すべきと、はちげんはなつて申せしは斯様のため。高氏の御手にかよると思ひ、我首てづからかき落し、勘當は冥途にて直にあふてゆるすべし。内侍様をかしづき、情の恩を報ぜよや。三世の諸佛大悲のちから、親子一所に道引給へ。是迄なり」と刀を首に兩手をかけ、ゑい／＼の聲の中、二人ははつとすがれ共、はや其かひもあらしの庭の、老木につもる白雪の、もろく落てぞ消にける。會者定離とはいひながら、あふも今別れも今、是目前の哀別離苦。憂を重ねる涙の袖に、舅の首をおしつよむ。内侍は「妻の命の親、是も我爲舅ぞ」と、身に引そへてもろともに、誠有ける現世の道、仁といひ義となづけ、忠孝深き法の海、ともに弘誓の舟岡山、煙の末も一筋に、亂れぬ御代のをしへなる。

#### 第四

比丘歌「夜さ様のねすがた窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、さかりまだ

しよがゑー拍子  
詞  
少くわんー比丘  
尼が歌の前後に  
いふ拍子(好色  
罰蒙國變)

まるたー比丘尼  
の異名比丘尼は  
もと熊野信者の  
尼なりしが頭を  
子細に包みて小  
歌を便りに色を  
賣る遊笑寛一  
早鐘まさりー早  
鐘打つより私が  
頭を打てば直に  
知れるとの洒落

蜘蛛一十文字の  
垣

しきねやの内、さては野にさく百合の花、しよがゑ、少くわんく」とぞ諺ひける。番ヤ  
イくやかましい丸太奴ら、暮に及んで何ごとじや。番所が目に見へぬか、うぬらが  
くる所でない。通れく」としかつても睨んでも、「さては野に咲百合の花、しよんが  
ゑ」扱々無禮者此所を知らぬか。坊門の宰相様の御下やしき、高氏將軍と御内通、後醍  
醐の天皇を此所に押籠、近日隱岐の國へ流しもの、夜の目も寝ずの大事の番。宰相様  
も只今奥に御入、追付お歸り。そのいておれく」ときめつくる。比丘ア、かたい侍  
じや。是より嚴い番所、波にゆらるとかより舟の中迄も、小歌は付たり假寝の伽によば  
んす。ねしめてのねごころは、髪の有よりないかたが、びらくせいでよいけな。番衆  
は猶用心、すはと云時はや鐘まさり、私がつぶりを打たんすりや、はやくはんく」と  
ぞじやれかくる。奥より「殿のお歸り」と、よばはれば番の者、ばらくとかしこまる。  
宰相ゆ〜と立出あたりを見廻し、あの裏の方は堀一重、犬のくどつた道も有、いか  
にしても無用心。明る早々めぐりに蜘蛛手をゆはすべし。彌々番を怠るな。夜中替りに定  
しからは、氣のつままる間もなし。番所は禁酒にして、萬に氣を付油断すな。追付高氏よ  
り大國を給はり、此宰相も公家をやめ、武家の大名と成時は、皆相應の知行とらすべし。

あびんー比丘さん  
もてきー相手  
まんがぢー手前  
勝手

しよげるーしげ  
るの轉歟しげ  
るは睡ましく語る  
よその町ー余所  
にするにかく  
白餅ー城持  
大納言ー小豆の  
一種なる故  
餠餅一案  
もろこしー玉蜀  
黍  
今井ザレー今井  
兼平とうまいナ  
シ  
有たけ云々ー有  
る限り皆  
太こもてー暫間  
になれ

奉公に精出せ。又後程見廻んと、上屋敷へぞ歸りける。番の者共のびをして、「やれき  
づまりやはおびん、旦那がいなれたもふ樂じや。歌をふと踊ろふと、夜中迄はこつちの  
もの。こよへく」と招かれて、比丘ム、ウ殿達は三人、わしがおてきはどれじやる。  
氣が定まらぬ」と云ければ、眞ハテ誰有ふ此はな」眞ヤア傳五平それはまんがち、今夜  
は身がとめぶろだ」眞イヤ身が先だ」とせり合はば、眞是々傳五軍太せりあひは無用。此  
源藏に任せてをけ。寢る時はもみ鬮でしづいてこい。先其迄は一盃あけてしよけるべい。  
ヤ、酒賣の又六がもふくる時分」と、比丘尼一人に侍三人、役目の番はよその町、聲高  
高と荷ひうり、「大名深草大納言、唐人分別ぬらりころりのかね平。やい大名とは白餅、  
深草とは鶉餅、大納言は小豆餅、唐人もろこし分別餠餅、ぬらりころりは鰻の蒲焼山椒  
味噌、眞兼平とは木曾殿の御内に今井ずし、酒盛にかくれなき一騎當千の御肴、磯打ッ  
波のまくりのみ、蜘蛛手かくなは十文ぎりの、茶碗に一ばい酒でも餅でも、うまい物のせ  
い揃、錢次第」とぞ賣にける。各悦び、「又六きたか。是見よこふした色遊び、酒も鮮も  
有たけはたけ買てやる。汝も飲で太こもて」又ア、それは忝い商して酒飲で、其内  
で利を取は、めでたい西が吹てきて、丸太舟の湊入、三人の御番こなたは加番に青のほ

思ひざし一氣に入  
入た人に蓋さす

まつかせしよし  
きた

錢しませふ一錢  
實はう

あひ一同類

熱心一取らうと  
思込む心

ん様、かるたには太この二、盃には太この一、私から」と引受てついとほし、「サア丸太様へ」とさしければ、各口をそろへ、「其盃を三人の中氣に入た男にさし給へ。其者が枕ならべる、鬮取よりは是がまし。思ひざしになされ」と、面々衣紋つころひ、鬢かきなでよならびける。比兵いやくそれでは氣がしれぬ。茶碗三ツで面々盃、わしを思ふ數程のんで、心中を見せさんせ。茶碗の數の重るが、私しが今夜の男じや」又「ヤア面白い酒の賣る瑞相」と、茶碗ならべて三升樽、「すぐにお酌」と立ければ、何れも「合點まつかせ」と、初手一盃はついくのみ、二盃目ははや我呑にて、三盃からが義理一ぺん、後には義理も瓢箪も、ふらりくがたちまちに、ころりくと息つきて、前後も知らず臥にけり。又是々寢入ぬさきに錢しませふ。是且那衆、はて手のわるい狸ねいり。酒代早ふ」とゆり起す、三ムマアよいはいの。たつた今寢入ばな、今宵は歸つてあすでも取たがよいはいの」と、いへば又六腹を立、「ム、扱はあひじやの。サアそなたから錢せふ」と、ねだれかよる其間に、壼の破れに月影の、白犬一疋尾をふつて、箱の鮮をねらひ付、くはへる所を又六、「どつこい」と首玉をさへ、「犬も人も此屋敷は食迹の大よせ、罷ならぬ」ともぎはなす。比兵是々いふても畜生執心がかはいひ。其あたひは私がやる。



ちなかのまゝ  
腹中の飯  
大臣―大煮

范蠡―勾踐會稽  
に降り入牢せし  
に范蠡魚面とな  
りて近づき密書  
を魚の腹中に入  
れて獄に投ぜ  
し語(吳越軍談)

中で一番大きなを、おなかのまゝ取て、魚計うつてたも」又「是は犬殿大臣がついた。何もあきなひ、丹後の鯖の一番卅八文合點か」比兵合點く。竹の皮一枚たも」とこかけに立寄、懐中より一通の文くるく巻、魚中に入れて「來い」と、投出せばひつくはへ、堀の破れに入にける。又六とつくと見すまし小聲に成て、又「是比丘尼殿、そなたは異國の范蠡をやるよの。此所は坊門の宰相下屋敷、天皇様を押籠置、定しそなたは、新田殿よりの案内と見たちがふまい。某は出雲の國名和の又太郎長年と云者、御厚恩の綸旨を受、近よるべき便、か様の商人せめて一人荷擔人のあれかし。奪出し奉らんと心をくだく所なり。御身の上有様に聞まほしし」と云ければ、比丘ヲ、我等は小山田太郎高家と申者の妻。新田殿の情を受、夫高家は討死し、みづからは尼となり、勾當の内侍様とひとつ住居の其中にも、天皇様をうばひ新田殿の御本意を、と思へ共女わざ、せめての便に御力を、付参らする計なり」と、語れば長年大きに悦び、「是ぞ御運のひらくる時、折しも番の者は喰ひ酔ふ。此堀一重踏破り、やすく奪ひ奉り、吉野の奥に皇居をすへ、根來法師熊野武者をかたらひ、吉野十八郷を都と定むる物ならば、北國西國なびくこと、案の内ぞ」とあん餅の、になひ棒にて堀一間、どうくくとつきくづし、つよ

一犬吠れば一  
犬虚に吠ゆれば  
萬犬實を傳ふの  
惑

鼻がもげる一臭  
氣の甚だしきさ  
まに云ふ鼻切ら  
れたにかく

といれば犬の聲々、一犬吠れば萬犬に、番の者共目を覺し、起あがれ共ひよろ／＼、  
 よろり／＼とよろめきながら、番無三塀を破つた。又六めか丸太めか、一打にしてく  
 れん」と、抜つれ／＼入けるは、危かりける次第なり。既に夜半の番がはり引連て宰相  
 検見の爲に來りしが、幸ヤアウ番の者は一人もなく、塀押破りしは心得ず。敵の忍びの  
 入けるぞ、こみ入て討取れ」と、喚いていらんとする所に、又太郎大肌ぬぎ、棒ひつさ  
 けつ／＼と出、「我等は酒賣の又六と申者。誰共知す十八計、我等が酒酔飲喰ひ、番衆にも  
 振まふてまんまと抱込、錢も拂はず塀を破つて入候。我等が爲には喰迄の敵、奥に氣遣  
 なさるよな。是へ追出し申べし。酒臭者を相圖に討取給へ」と云ければ、幸、チ、出かし  
 たく。急いで是へ追出せ」又「承る」とつ／＼と入、無二無三に追立る。三人の醉ざめ共  
 逃出れば、幸「そりや討取れ」と取廻す。番「イヤ我等は御内の傳五平」傳五平でも酒くさ  
 いはしれ者なり」とはたと切る。「我等も御家來源藏」やれ／＼彼奴も酒くさい」番「拙者  
 は軍太」こいつは取分酒くさい。一人ものがすな」と、片端切て捨にけり。又太郎とん  
 で出、「お手柄／＼裏門は大かた仕廻、表門の酒くさよ鼻がもけていにまする。皆々表へ  
 御廻り、「チ、心得た。随分はなをきかせよ」と、表門へとかけ出す。其際に高家が女房

白露—知らぬ

雨を含める—此句太平記卷五にあり  
梁園—梁の孝王が宮室苑園の遊を好めるを云ふ  
華軒香車—共に立派な車を云ふ  
千歳の坂—白金の杖の歌、千早振神のきりけんつくからに千歳の坂も越えぬべらなり(古今集)

天皇の御手を引、走り出ればあまたの犬跡先を取巻て、吠かよれば又太郎、「うちもらさ  
れの今井の四郎、手なみを見よ」と酢も餅も投出し、虎の尾を踏毒蛇の口、犬の背をお  
どりこへ、大和路さしてぞ三重

### 天皇かちどの御ゆき

世は末世に及ぶとて、日月は地に落ぬ、ならひとこそ思ひしに、我等いかなれば、  
王位を出てかく計、人臣にだにまじはらで、雲井の空をも迷ひきて、行衛いづくと白露  
は、草葉の上のをきもせで、袂にさむき秋の霜、菊月も未つかた、故宮を忍び出給ひ、  
あやしの賤の神もうでに、やつせど馴れぬすけの笠、雨を含める孤村の樹、夕べを送る  
遠寺の鐘、憐を催す時しもあれ、御いたはしや先帝は、梁園の昔の御遊、華軒香車の外  
を出させ給はぬも、いつしか馴れぬ旅はどき、千歳の坂と詠ぜしも、耳には觸れて手に  
ふれぬ、うきふししけき竹の杖、長年一人御供にて、知らぬ野山をこよかしこ、たどら  
せ給ふ御有様、よその見る目も恐れ有、こよはいづくと里人に、いざ烏羽繩手秋の山、  
岩にくだくる瀧川の、どうくく、どつとよせくる追手の聲か、それがあらぬかいや

鳥羽一問ふにか  
玉鉾の道詞

關戸一せきあや  
るにか

男山一今こそあ  
れ我も昔は男山  
采ゆく時もあり  
こしものを古  
今集  
三津浦一難波江  
にて見つかく  
五手舟一五挺立  
の舟(但言集覽)

まてしばし。あれは野面にたれまねく、かどしの影に落人の、鳥よりさきに驚きて、と  
 もにむら立鷺の森、急ぐとすれど玉鉾の、ならばぬ道のけはしきに、御足もかけ損じ、  
 御わらんづに流るゝ血は、草葉に染ていさよ川、紅葉しがらむごとくなり。あはれ實に  
 昨日迄、玉樓金殿の床に坐し、月に戯れ色香にそみ、花やかなりし玉躰の、今日は岩間  
 の苦むしろ、かたしく袖に御涙、せきあへさせ給はねば、さしにも猛き長年も、涙は胸  
 に關戸の院、こよは名高き山崎の、麓にみだす荻萩薄、ふみわけなくや狐川、東の空を  
 眺むれば、あれく宇治のかはざりたへぐの、せとの淺瀬にわらんべの、小手さしつ  
 るゝ聲々に、引歌故郷戀しや我ふるさとの、柴のいほりもなつかしや。庵もしばの、柴  
 の庵もなつかしや「戀しゆかすと聞からに、實に九重もはるぐと、跡に名残の男山、  
 さかゆく事も有こしに、今のうきめを三津の浦、西にかすみて淡路がた、須磨のせきも  
 りよびおこし、通ふ千鳥のちりくくと、よせくるく、波もよせくるおもかち取梶  
 拍子そろへてさ、舟歌面白やくさつさ、堺の裏遠く、帆を十分にあけた所が、面白い  
 よの、何にたとへん五手舟、鹽風さむく吹通ふ、かさも袂もひらくく、ひらの若江  
 も過行ば、日影もさがる藤井寺、はや告渡る鐘の聲、こんこん剛山もはるか成、異あれ

本地垂跡和光―  
日本の神々は佛  
の垂跡なり和光  
は佛が光を和げ  
て身を現す  
興津白波―風吹  
けば興津白波立  
田山夜半にや君  
が獨越ゆらんの  
歌による

法の駒―御法と  
乗り  
銀覆輪―銀にて  
鞍のふちをとる

しは手―鞍の前  
輪後輪二個所に  
着ける紐

御覽候へ。かすみて見ゆる高嶺こそ、志貴の毘沙門にて渡らせ給へ」と奏聞すれば、主上御手を合せ禮拜有、「佛法擁護の本地の月、垂跡和光のかけ清く、再び朝廷あきらかに、四海を照させ終へや」と、丹精無二の御祈、神慮もあんにほかられて、たゞたのめ、年ふる松の壽を、御代にゆづりて高やすや。其にはあらで是も又、興津白波立田ごへ、よはにや君が一しぐれ、雲行空をこかけかと、濡てたよすみ三重給ひけり。取傳へたる梓弓、光陰矢のごとく楠正成が百ヶ日、立や其名も忘れがたみの一子帶刀十一歳、父が最期の無念さの、胸に止まり骨にしみ、幼心に只一騎、とぶらひ戦思ひ立、鎧の袖に小櫻の、花を手向の法の駒、曉深き星の影、ともにかどやく銀覆輪の、鞍の山がた山道の、小石まじりの小笹原、そよ吹風にくりかけて、取つたる手綱こむらさき、藤井寺を弓手になし、右手へさらくしとくく、かつしくと歩ませて、神の昔も念力の、示現は今もあら人神、天神の森にぞ著にける。あら不思議やうしろのかたに女の聲、「待てよ待てよ」と呼びかけたり。何者やらんとふりかへれば、きぬ引からけ腰刀、長刀かいこみ追かくるは、母上なり。馬南無三寶、我を止めん爲なり」と、一鞭くれてかけさする。息をはかりに走り付、鞍のしほ手をむすと取、留ても引ても駟馬の、二三十間引ずられ、

をとなやく―大  
人役

面縛―後手に縛  
らる

一あぐみ―こ  
まり

母「やれ物がついたか帶刀、母にもしらせずいづくへ行ぞ正行。母は息切しぬるをも構はぬか。馬を留ぬか悴め」と、さけび給へば、正行馬よりとんでをり、土に手をつき頭をさけ、正「父の忌のあき候へば、とぶらひ軍仕り、高氏と打果さんと思ひ立候。御暇申さぬ段眞平御免下され」と、さしうつぶいてぞ居たりける。母はとかふも涙にくれ、「エ、如何をさなければとて、十ヲにあまればをとなやく、などさほども辨へなき。柙檀は嫩よりかんばしといふたとへも有、正成の子ならずや。日本半分切取たる高氏に、おこ」と一騎かけ向ひ、一太刀合する迄もなく、多勢が中に取巻れ、當座に討ればまだしもよ、生捕となつて面縛せられ、恥辱の上に命を失ひ、いつの世にか天皇様を御世に立、父亡魂の本意をば遂るぞや。親の敵討んとて、かろくしく身を捨るは、葉侍の上のこと。父ごぜの櫻井より、汝をかへし給ひし時、老先迄の教訓を、母にも語り聞せしが、百日立やたどすにて、其諫を忘れしか。一族かたらひ軍兵揃へ、菊水の旗眞先にをし立、古今無雙の名將とよばれたる足利高氏に、一あぐみあぐみせんとは思はずして、一騎武者の働きに、いか成手柄したればとて、其名をあぐるばかりにて、天下の爲には益もなし。幼なく共楠正成が子、六十余筋を重荷に持、大事の身とは思はぬか。うらめしや情なや、

サア歸ればやかへれ。重ねてからは口ではいはぬ、つめく〜するぞ覺てるや。是に付ても正成殿、今三年世にながらへ、おことが十四十五ならば、かくうきせわもせまい物。はかなの浮世や淺ましや」と、諫め口説て泣給へば、さしもに勇む正行も、母の歎きになき父の、顔を今見る心ちして、母の膝に抱き付、聲も惜まず泣き居たる、親子の歎きぞ憐なる。かよる所に又太郎長年、天皇をおひ參らせ、森を目にかけ來りしが、ヤア心得ぬ、夜はまだ深きに幼き身に、物の具かため女も長刀横たへしは、ム、ウ例の山立よな。幸々彼奴を威して、夜道の案内させんと思ひ、長こりやく山賊、熊野詣の同道に病人有て迷惑なり。夜明迄看病すべき所や有。送つてくれば急度禮をせん」といへば母聞もあへず、「いや〜我等山賊にてはなし。熊野道者の御病人とは殊勝にもおいとしし。我宿所は三里計、折ふし是に馬も有、召れて御入候へかし」長いや心ざしは嬉しいが、人を忍ぶ我々、其中に夜明ては氣の毒。三里行けば隠れもなき楠に縁有故、かたがたを頼む迄もなし」と、行過れば、母是申、楠に縁有との給ふはどなたぞ。是こそ正成が妻や子にて候へ」長扱はそふか。我こそ隱岐の國名和又太郎長年と申者、おひ奉りしは、忝も後醍醐、天皇」と、いふより親子は「はつ」と計、退つて額を地に付れ

御覽、思召此  
の自尊の敬語は  
天皇上皇ならて  
は使はぬ

さまも切らぬ  
さまは狭間にて  
城の櫓の窓も切  
らぬ

ば、君も泥土におりさせ給ひ、帝汝は帶刀正行汝は母、いづれも正成が形見かや。妻子を御覽有につけ、父が忠節をこそ思召出せ」とて、正行が髪かきなでよ、龍眼に御涙をうかめ給ふぞ有がたき。扱坊門、宰相かへり忠にて君とらはれと成給ふを、小山田が妻と心を合せ、奪ひ奉りし有様くはしく語り、長高氏方の追手の軍兵千騎計、あれあの松明こと急なり。先御邊の館迄、急ぎ御幸なし申さん」と云ければ、正行頭を振て、「いやいや我等が館へ君を入奉り、追手の勢を引受、さまもきらぬ堀一重、溝同前の埋れ堀、一日も堪へず責落され、敵に分量を見さがされ、後日の合戦成がたし。此所につよさよへ追手の大勢打散し、出合頭の初軍に、敵に一しほ氣を付て、騷惱ます程ならば、重ての軍に二の足ふまは必定。是非此所に喰留て、一合戦」とぞ申ける。母上睨んで「ヤイ小癩者、たつた今異見した其舌も引ぬに、御前共憚らぬ利發だてなそれなんぞ。兄と云ても大じない長年殿、武勇と云年かさ、おことにならひ給ふべきか。假初ながら大事の所、あなたの下知に任せてるや」と、ねめ付給へば又太郎、「年に足ぬ正行殿、此所にて戦はんとは、勇有て頼もしし。去ながら味方は貴殿と某只二人、追手の勢は一千余騎。死物狂ひはそは知らず、勝べき道理更になし」と、いはせも果す正「ア、さなの給ひそ。



實の一天―一天  
は今時の三十分  
にて午前四時半

一疋―一幅  
かねのを―鐙口  
の緒か

とむね云々―驚  
く顔

無勢なりとて戦かはずんば戦ふ時節は有べからず。父正成は三百騎に足らぬ小勢にて、十萬の敵を幾度か破りたり。軍は奇正變化に有、時はや寅の一天、我計略を廻らさば、千騎は愚何萬騎も、驅破つて見せ申さん」と、廣言吐ば母上、「エ、小面憎や童なら童の様にしてゐるや。出るまよの軍法だて。サア味方二人で、千騎の敵に勝つべき智略があらばいふて見や。道理が悪いと正成の子でないぞ。サア申せく」と問ひかけられ、正さん候惣じて子共のいさかひにも、強きは弱きを侮つて油斷の負をする物也。君落人の御身に、御供とても一兩人、千騎に余る追手の兵、多勢を頼みに油斷するは必定。我等と長年兩人は向ふの松原にかくれ入、母上は君の御供して、天神の社に忍び、上を始各々下著の小袖をぬいで、裏表一疋くるとき放し、本社末社のかねのをともに大旗小旗の尺に切、石を括つて森の梢、こよかしこに投げかけ、敵寄くる共しづまりかへつて、ほのく、明の朝風の、霧のひまぐ、森の樹蔭に、旗の手のひらりくと閃くを、小勢と見る者有べきか。一のみにあなどつて、油斷したる追手の勢、とむねをついて色めく所を、神樂堂の太太鼓、亂調に打給はど、先陣よりくづれ立、後陣もともに亂るべし。其時我々小松原より、よこあひに切て出、十方無盡に切散さば、陣をわれし敗軍

歸鴈云々一鳥起  
者伏也、獸駭者  
覆也(孫子)  
かゝる時一懸る  
と斯る

の、ふみとまつたるためしなし。多勢かへつてかせと成、人にて人をせきふさがれ、同志討友討度を失ひ、八方へ逆ちつて、味方の勝利正行が掌に握たり。母上いかに」と云ければ、母「いや、夫も一圖の軍法。若又敵の大勢が、此森へはかゝらず、汝が籠る松原へ先にかゝらば如何せん」正「ヲ、其時こそ松原の泊り鳥を追立ん。明ぬ先より立鳥は、歸鴈つらを亂るなる、隠し勢と心得取てかへして此森へ、かゝる時には彼手だて。鳥と旗とに威されて、中に漂ふ寄手の真中、只一驅に踏散すは、蚊を殺すより猶やすく、骨を折すの勝軍、案の内に候」と申上れば天皇も、「天晴正成が子なりけり。末頼もしき若者や」と、忝も感涙に、御衣をしほらせ給ひければ、長又太郎は卅五歳、十一歳の正行に、今日の大將軍、御下知に任せ候」と、手をつかねたる武士の、弓矢の禮こそただしけれ。母は悦び「ヲ、でかしたく、惣じて大將は、必弓矢を帶する物、母が其心に持たるは長刀ならず、是見よ」とさやを取れば、弦をはづせし村重籐。母「おことを慕ふいそがしさ、簞負ふ間もなかりしぞ。薄なり共押し切て、かぶら矢いるは軍神の祭ぞや」と、弦袋そへてたびければ、取て戴き。正「あれ、追手の松明近付たり。夜明とて程もなし。母上は我君を社の森へ御供あれ。敵は小勢と侮る共、味方は、必大敵とて、

弦袋 弦巻にて  
丸く腰に提るも

どまくれーうる  
たへる

恐ること有べからず。何萬騎よする共、亂る迄は音するな」と、下知する聲もわかみどり、松原さして三重入にける、追手の大將、山口入道嫡子八郎久國、二男九郎宗重、其勢一千余騎、もみにもふで馳來り、此松原こそあやしけれ。いふても二人か三人か、草村の虫を取よりやすかるべし、骨折て何かせん。松明をふみしめし、松原をおつ取巻しめよせて討とれ」と、ひしめく所に正行長年、木の根をゆすり梢を動かし、弓のほこにて驚かせば、驚かされて數萬の鳥、聲を立て鳴さはぐ。山口親子大きに驚き、「一疇の鳥の俄にさはぐは、此松原に天皇方の軍兵の、隠れ居るに極つたり。ふかくくと近付より切立られては悪かりなん」と、大將を始諸軍勢、進みかねてひかへたる。童心の楠が、智惠一ツにまはされて、一千余騎の兵の、どまくれみだれうろたへし、智略の程を恐ろしき。山口入道聲をかけ、「あれく東もしらみたり。天神の森に陣を取、備へを立て責めよせん。いざこい」と見渡せばこはいかに、朝霧深き森の木の間。色々の旗ひる返り、あらしに靡く有様は、只花紅葉のごとくなり、「南無三寶前にも敵後にも敵、いづくに命をのがれん」と、大將始諸軍勢、具足震ひのかたくく、鳴子を引にことならず。相圖をたがへず神樂太鼓、どうくと打聲に、此そりや責つつみなふ怖や」と、主は下

をんまはしー遺  
適し

人の後にかどみ、子は親を楯にして、腰をぬかし氣を失なひ、辻まどふ真中へ、又太郎  
長年、楠帶刀正行と名乗かけ、わり立てをんまはし、火水になれとぞ三重戦ひける。臆  
病神に眼もくらみ、二人を千騎萬騎と見て、辻足落足深田にふんごみ岩根に乗かけ、我  
打物にて死るも有、片時が間に手負死人三百余騎、生たる者は落失て、残りすくなに成  
ければ、「矢責にせよ」と山口兄弟、森に向つて立ちならび、矢種を惜ますいかけたり。  
味方には弓一張矢は一本もなかりしに、正行思案し、薊り捨たる稻かき集め、五尺計に  
たばねあけ、社人の烏帽子淨衣をきせ、木の間にそつと立ければ、「すは天皇よ余すな」  
とさし取引取さんぐに在る矢さき、薬人形に留まつて、針を植へたる如くにて、味方  
の矢種と成たりし、幼心に孔明が、昔を耳にふれつらん、頓智の程こそやさしけれ。「エ  
エ目出度し」と又太郎、矢をかなぐつて大音上、「いかに寄手の人々、早天よりのお出  
随分御馳走申せとて、新田殿の御意を受、本間孫四郎、さび矢少々持参せり。何なく共  
賞翫あれ」と、矢つぎばやに射かけしは、嵐に雪の飛如く、面に立たる山口兄弟、弓手  
右手へ射伏られ、一陣しらけてさつと引所を、正行親子打物かざし、「きたなしかへせ」  
とをつかくれば、山口入道すきまを見て、「女中やらぬ」とむんずと抱。正行すかさず上

しちけー負色に  
なる

井手—井堰

帶つかんで中にさし上、「ゑいやつ」と井手のふかみの泥水へ、眞倒様にぞ打こんだる。残る軍兵恐れをなし、四方へばつと散亂し、近付敵こそなかりけれ。「軍の手合かど出よし」と、勝どきの聲太鼓の聲、松にかぐらの千代萬歳と、君を馬に駕し奉る。長年は項羽が勇、正行は孫子が智、母が教へは孟母が仁、是大將の智仁勇、合せて三ツのみよしのや、よしのよ内裏に行幸なる。

## 第五

御裳濯川—伊勢内宮の前を流るる川にて皇統連綿を云ふ

頭の中將—藏人の頭と近衛中將の兼官

神風や、御裳濯川の流れたへせぬ神國のしるし、後醍醐の天皇楠正行が守護によつて、吉野山に皇居有。新田義貞馳參じ、都作りと聞へしかば、北の方勾當の内侍、千草の頭の中將洞院左衛門督心を合せ、三種の神寶内裡に残り給ひしを盗出し奉り、神璽寶劔は内侍の身に付參らせ、小山田が妻御供すれば、内侍所のしるしの御箱、頭、中將左衛門督兩人荷ひ奉り、人目忍べは是も又、晝をば何とうば玉の、夜道に同じ山かけや、三輪の里にぞ著給ふ。鳥居の前成御手洗の、水舟石に御箱をすへ、内侍は寶劔を神木の杉にかけ、しばしやすらひ給ふ所に、覆面したるおのこ、同じ出立十人計道端につくばい、

「我々は近邊の土民共、今度天皇様吉野山にいらせられ、新田殿楠殿内裏を吉野に御造營なさるとに付、天照太神より傳はりたる内侍所様と申御寶を、只今吉野へ御供遊ばす由、お公家様のお身にて御太義千萬。まだ是より廿四五里、中々お足つどくまじ。賤き下々の身ながらも、日本の地にすむ冥加の爲、其御箱を吉野迄肩にのせ申たし。息をかけるも恐れに存、皆々覆面致し、垢離を取身を清め候。仰付られかし」と思ひ入てぞ申ける。兩人聞給ひ、「扱々奇特の心ざし、是こそ内侍所しるしの御箱とて、天照太神の御たましひ御かけのうつりし御鏡、汝等がかたにかよらせ給ふこと、よくも冥加にかなひたる、果報の者共有がたく存、擔ひ送り奉れ」との給ふ所へ、六尺ゆたかの大男、是も覆面目計出し、「我等も當所の百姓、冥加のため寶の御箱、吉野迄かき申たし。鼻息かくるも恐れに存覆面もいたしたり。御ゆるし下され」と、望めば兩人、「チ、望みの者は幾人にも其身の祈禱、かき奉れ」と有ければ、耳ハア有がたし。是そこな衆さきがたでも後がたでも、いづれもよつて片はななされ。片はなは我等一人、吉野迄同道、さきへ著て覆面取近付になるべし。道中萬事申合せふ。サア來い」といひければ、各ひそくさよやひて、「いや其方が相かたに我々は成まい。こつちの組へわたすか、さなくば其方

ひとりか、いか様共すき次第。しらぬ者同志交ることは、此方はいやじやく」といひはなす。耳やあら珍しい。知ぬ者どし相かたいやとは、錢をとる出籠じやと思ふか。冥加の爲身の祈禱、願ふは誰も同じこと。どふも我等一分立ぬ、嫌ふには様子が有ふ。其を聞ふ」と理窟づめ、去ア、小むづかしい何の様子、見た所お手前は人間はづれのせい高島、肩が合ぬによつてのこと。どふでもならぬ」といひければ、耳ム、聞へた、肩が合ずば昇くまひ。お供すれば同じこと。サア皆よつてかき奉れ」と、ひつそふて「我等はお供」と、身拵するを見て、去いやく所詮此方構はぬ。供なりと昇なりと、己がさん

己がさんまい  
汝が勝手

毘沙門立一仁王  
立に同じ  
柿本一人曆にて  
次の熟せぬと共  
に柿の縁語

まい皆来い」と立かへる。耳ヤアやらぬ」と道中に、大手をひろげふんばたり、「拙者同道いやがるは、面こそ見へね大かた夫としつたな。尤々御所柿と澁柿とは皮むかいでも知れる物。是見よ和田の新發意源秀と云御所柿」と、覆面を取て捨て、毘沙門立にすつく立、「ヤアうぬは坊門の宰相柿。可愛や生れはよけれ共、持ちなしわるさに澁柿に劣つたな。公家ならば公家の様に、柿、本の流れをくみ、腰折歌でもよまかして、身にも熟せぬ武家まじはり、終に刃にさし通され、串柿とならん笑止さよ」と、かんならくとぞ笑ひける。宰相覆面取てすて、「エ、口惜や、勾當の内侍を大森彦七盛長に

あたゝかなーま  
んまと

木まぶりー木に  
とり残されし果  
じゆくし首ー熟  
柿の如き落ちや  
すき首

授けんと、契約せしをおのれに邪魔をいられ、天皇を推籠高氏より恩賞を受んとすれば、あの尼めに奪はれ、今又三種の神器を奪ひ、高氏公へ奉らんと欲する所、又妨ぐる推参者。是程迄しこみしこと、本意を遂げでをくべきか。下り坂の楠新田に組せんより、運に乗たる高氏公に順へ。取次せん」と云ひければ、源秀大口あいてかっらくと笑ひ、「ヤイ高氏は名大將、うぬらが様成不忠の臣、あたゝかな用ひられんや。天子に向つて弓引朝敵の名を恐れ、後伏見院第二の宮量仁親王を御位に立、吉野の内裡は後醍醐の天皇、京の内裡は新帝とあがめ、義貞共和睦し、一家のまじわり舊の如く有度願、立憲法印を以て奏聞ある。内奏の爲只今某吉野殿へ、参る折から出合しは、うぬらが因果の木まぶり、梢に残つて烏の餌食とならんより、じゆくし首ゆすり落し、踏つぶしてくれん」と、飛でかよれば下人共、一度にはらりと取まはし、「ヤア奇怪成雑言。をのれこそ赤面の熟柿坊主、踏つぶしてのけん」と、左手右手より取つけば、源ム、ウ此源秀を熟柿とな。熟柿にたかる目白共、捻り殺して見せふか」と、引きよせて片端より、首筋つかんで一しめしめてはかつぱと投げ、しめては投付、投付く宰相に飛んでかよれば、「叶はじ」と山をさして逃て行。源秀あまさじいつ迄か、身を逃るべき三輪の山、ひばらをわ



けて追かくる、二人の女中公家達も、「何事が起りしぞ。所は三輪の御神前、是は神代の御寶、守りめもつき給ふかや。神力をそへ給へ」と、あはて給ふぞ道理なる。かよる所に大森彦七盛長、手勢ひき具しどつとかけよせ、大年来心を盡したる内侍はあれよ。先なま公家ばらひつくよれ」兵承はる」とひつぶせく、二人に繩をぞかけたりける。大「扱其櫃は心得ず、何か有、明て見よ」と、いふより早く郎等共、御箱にすがれば、兩人涙を流し聲をあけ、「やれ情なやもつたいなや。夫こそ忝も我國の御寶内侍所、十善の御身にさへ拜み給ふことかなはず、不淨無禮の手をふれんとは、忽眼くらんで、立すくみに死なん淺ましや。情なやそこ立退」と泣給へど、大「扱ことおかしい神より強い軍神の、眞先かける兵に、何の罰」といふまよに、からけの布を切りほどき、蓋をとれば恐ろしや、御箱の内鳴動して、いなびかり天地に輝き、神鏡朝日の登るがごとく、虚空にあがらせ給ひける。近づいたる雑兵共、忽悶絶血を吐て、のつけにそつて死してけり。無道の盛長ちつとも恐れず、「よし／＼さはらぬ神にたよりなし。心をかけし女を連れて歸る計に、罰もたよりも有べきか」と、走りよつて内侍を、ひつ立んとする所に、杉にかけたる寶劔の、さやを離れて刃の光、天に輝き地になり渡り、盛長が頭の上、ひらめ

いがき一齋垣、  
神社の垣  
三種の三紙一三  
種の神器をさす

きかより追廻しく、劔のはかせ神風の三豆逆るを追ふて千早ふる、いがきもこへてに  
けて行。吉野の勅使北畠の准后親房卿、新田義貞楠正行、三種の三紙御迎に來り給ひ  
しが、「三輪山の震動何事か」と、急ぎ驅付「こはそも如何に」と驚き騒ぎ、兩人の繩を  
解給へば、内侍は夢のこよちにて、内小山田が妻の情にて、あひ見る今の嬉しさ」と、盛  
長宰相が悪逆くはしく語り、嬉し泣こそ道理なれ。足利高氏三社の神の靈夢蒙り、吉野  
殿へ參らんと此所に行かより、驚き給へば新田楠「すは大將と大將との、相手づくぞ」  
と身構へして、既に危く見へし所に、和田の新發意宰相が首ひつさけ、敵ア、是々粗忽  
せまい」と、真中へかけ入、「先惡人一人は亡し」と、首投出し義貞に向ひ、「高氏卿朝敵  
のとかをひるがへし申爲、量仁親王を御位に立、京の内裡とあがめ、後醍醐の天皇を吉  
野の内裡とうやまひ、新田足利和陸して、帝を守護せしむべきとの願ひ、立惠法印の取  
次我等其お使」と、申詞の中より、白雲たな引異香くんじ、杉の梢にかよりしは、不思  
議なりける次第なり。兩寶童子の御相好、たへなる御聲あざやかに、「天に二ツの日なし、  
地に二人の王なし。量仁親王に新帝の位を授け、後醍醐の天皇は院の御所とあをぎ、帝  
都は高氏はをかため、吉野の都は義貞守護し奉れとの神勅なり。我國の三ツの寶のあら

んかぎりは、國とみ民も豊ゆたかにて、敵する者の有べきか。寶劔ほうけんの威徳ゐとく疑ふことなかれ」との給ふ所に、有難ありがたくも寶劔ほうけんは、盛長もりながが頸くびをさし貫ぬき、虚空こくうに閃き歸らせ給ひ、元のさやに納なりしは、有あがたかりける次第しだいなり。「見よく惡魔あくま降伏かうふくの、寶劔ほうけんは勇神ゆうしん璽じは智ち、我わが内侍所ないしじよは仁じんの鏡かぐみ、智仁ちじん勇ゆうの三寶さんぼうも、佛法僧ぶつぽうそうと王法わうほふの、民安全たみあんぜんに守るべし」と、御詫宣ごたくせんのうちよりも、御かたちは鏡かぐみと現げんじ、内侍の袖そでにうつらせ給ふ。天下一てんか統源氏とうげんじ一統いつとう、太平たいへい國くにに太平たいへいの、君きみが威光ゐくわうは万々まんざん歳さい、治さる御代ごよこそ久しけれ。

